



千葉大学医学部同窓会報 第126号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るの は な 同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るの は な 同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区玄鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るの は な 同窓会
電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail:idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp



全国のるの は な 同窓会の諸先生方に二〇〇一年迎春のご挨拶を申し上げます。本年も医療関係者にとって暖かい年にはなりそうにありません。と言って、手を拱いて行政の医療費抑制政策の思う壺に嵌まるのは、何としても我慢がなりません。病院関係者も勤務医も開業医も同窓生みんなが手を携え、病・病連携、病・診連携、診・診連携を活用して目減りを少しでも少なくするように努力するしか無いと思います。ここで同窓会の存在意義が問われることになりましょう。

東京るの は な 会則の目的の項には「本会は会員の親睦、福祉並びに向上発展を図るを目的とし、あわせ

て母校及び千葉大学のるの は な 同窓会と密接な関係を保持し、その行う行事に協力する。」とあります。これを見ると分かるように、主たるものは親睦と思われ、21世紀に入ったこの際、同窓会は「どうあるべきか」を考え直す時期ではないかと考え、理事会で協議して頂く予定にしております。私個人の考えは、文科系の同窓会とは異なり、「るの は な 会」は同業者の集団です。同業者の集まりでは、ただ飲み食いして親睦が果たされた、と言うだけでは何とも情けない同窓会ではないでしょうか。たまに出席した先生が自分の知り合いの先生がいっしょにしゃべり、誰と話してよいか判らず、

新春に寄せて

るの は な 同窓会会長

長澤仁一 (昭24)

会の終わりまで一人ぼつねんと飲み食いして帰るとき、「もう来たくない」と思ってしまうでしょう。こういう人達を失望させないような同窓会はどういう形であっていいか。

東京るの は な 会では、たまたま今年、名簿を作ることになっておりますので、名簿編集委員の先生方がいろいろ努力されて、病院勤

務の先生同士および病院勤務の先生と開業の先生とが連携しやすくなるような名簿(ホームページのアドレスも入れて)を作ろうとして下さっております。同窓会を単なる親睦会に終わらせない、とするこの試みが成功することを願っております。

要事項は研究院教授会で審議・議決する。研究院に所属する教官は、自分の専門に就いて学府(大学院)の授業科目を担当するとともに、学部の授業、普通科目の授業を担当する。したがって、講座が授業の責任を負っていた従来とは異なり、教官個人が授業の責任を持つ事になった。学部は機構上存在するが教育を行うだけの組織となる。(二面に続く)

千葉大学大学院学府研究院構想

大学院医学研究科

免疫発生学教授(前医学部長)

谷口 克 (昭42)

平成13年4月から千葉大学医学部の機構が大きく変わる。学部から大学院に組織換えをすることになった。いわゆる大学院重点化である。20歳人口の約40%が大学に進学し、高等教育の普遍化、大衆化が進み、高等教育が大きく変貌した。さらに昨今の初等・中等教育現場における学力低下と相まって従来のような大学機能では対処しきれなくなっている。そこで、本来の高等教育を行うための教育研究組織として、大学院にその機能を負わせる政策が取られた。その結果、旧七帝

国大学および東京医科歯科大学、東京工業大学、一ツ橋大学は学部から大学院に組織換えをすることになった。組織の重点を移し、大学院化することになり、平成12年までに完了した。平成13年からは千葉大学医学部・薬学部、金沢大学医学部・新潟大学医学部・歯学部、神戸大学医学部が大学院化する。千葉大学の場合は、他の大学と異なる大学院化の道を選んだ。九州大学を除く他の大学は教育・研究一体型の研究科方式を採用したが、千葉大学と九州大学は教育と研究を分離した機構を採用した。千葉大学・九州大学方式は、教育組織を学府と称し、研究組織を研究院と称する。研究院に教官身分を置き、人事等の重

要事項は研究院教授会で審議・議決する。研究院に所属する教官は、自分の専門に就いて学府(大学院)の授業科目を担当するとともに、学部の授業、普通科目の授業を担当する。したがって、講座が授業の責任を負っていた従来とは異なり、教官個人が授業の責任を持つ事になった。学部は機構上存在するが教育を行うだけの組織となる。(二面に続く)

要事項は研究院教授会で審議・議決する。研究院に所属する教官は、自分の専門に就いて学府(大学院)の授業科目を担当するとともに、学部の授業、普通科目の授業を担当する。したがって、講座が授業の責任を負っていた従来とは異なり、教官個人が授業の責任を持つ事になった。学部は機構上存在するが教育を行うだけの組織となる。(二面に続く)

最終講義のご案内

○増田善昭教授
日時 平成13年2月14日(水)
午後2時30分

場所 医学部附属病院第一講堂

演題 「虚血性心疾患の画像診断」

○中島伸之教授
日時 平成13年2月16日(金)
午後2時30分

場所 医学部附属病院第一講堂

演題 「一外科医の履歴」
(ニューヨーク大 阪一千葉)

本年度より医学部主催の退官記念式典は廃止されました。

紙面紹介
附属病院ニュース 3面
人事異動 3面
支部長新年の挨拶 4~6面
るの は な 随想 6~7面
教室だより 7~13面
スパルタスロン 13面
るの は な の我が恩師 14面
日本整形外科学会 15面
アジア寄生病学者連盟 15面
日本小児リウマチ研究会 16面
同窓会員著書紹介 16面
各地のるの は な だより 19~21面
クラス会 22~24面
世界でテラテニス 24面
加納六郎学兄を悼む 25面
常任理事会議事録 26面
るの は な 美術展開催 26面
第2回るの は な 学外研究助成 27面

(三面に続く)

(一面より)

千葉大学方式は九州大学方式と異なり、教育組織である学府は医学と薬学が共同で担当する医学薬学府と称し、医学博士、薬学博士の他に新たに環境医学、高齢医学、高次脳機能、発生、遺伝子工学、移植、生命科学研究所さらには医療デザイン専門官、薬剤耐性専門官、治験管理官など社会的要請の強い領域の人材育成として医薬学博士を育てることとした。医学と薬学両方の知識を合わせ持つ医薬学博士を取得するためには、医学と薬学領域からそれぞれ15単位ずつ取得することが義務づけられる。

研究院は医学研究院と薬学研究院とそれぞれ別個に存在し、それぞれの領域に特化した研究を推進することになる。研究院の機構は九州大学と同じである。これによって、教育の系統性を維持したまま、研究面では従来の講座制に縛られない自由な組織再編を構築することができる。21世紀の医学の進歩にいつでも対応できるシステムとなった。

千葉大学における教育と研究を分離する学府・研究院構想のもう一つのメリットは、この構想が単に医学部と薬学部の機構改革に止

まらず、全学的にこの方式で機構改革が行われる事がある。研究教授は従来の文部省が承認したことを意味している。すなわち、学府・研究院構想は一学部の改革構想ではなく、全学的に実行されはじめて機能する制度である。平成14年度以降は自然科学研究科をはじめとする他の学部・研究科の大幅な機構改革がスタートすることになり、医学・薬学部の改革は重要な意味を持った。

医学研究院では高次脳機能、発生、遺伝子、移植などの分野の生命科学研究所において世界に貢献すべく再編が行われ、さらに生命科学の成果を基盤とした新しい治療技術を開発し臨床応用する、いわゆるトランスレーショナル・リサーチを専門に行う先端応用医学講座を設置した。そこでは21世紀を先取りした医学ともいべき細胞治療、胚性幹細胞医学、遺伝子治療、ゲノム医療、移植医療を目指すことになる。

一方、附属病院は機構上医学部附属のままであり、研究院に所属する臨床系教授は従来どおり診療科長を兼ね、実質はこれまでとかわらない。

研究院への改組の伴って、新たに誕生したものとして

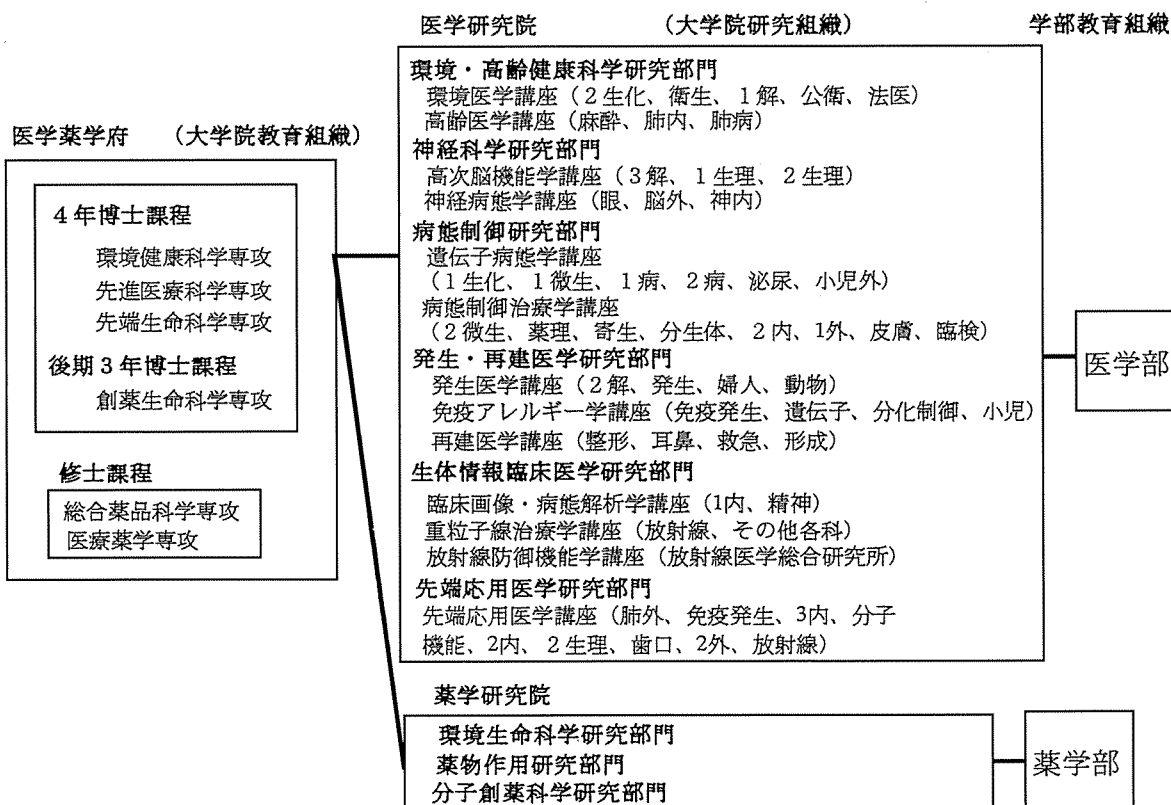
は、研究教授・研究助教授がある。研究教授は従来の講座を持たず、主任教授のもとに置かれる教授で、人

事権はなく研究教育に専念する。平成13年から4名の研究教授と2名の研究助教授が誕生する。研究の急速

な進歩に対応するために大きな力になると思われる。これらの新しい試みは今後千葉大学で活躍するであろう

うわれわれの後輩のために成し遂げられたものである。(新組織は左の図を参照されたい)

平成13年度発足する千葉大学大学院 医学薬学府および医学研究院・薬学研究院構想の全体図



祝 表彰

平成12年秋表彰

警察庁長官賞

福田 恵司 (昭29)

日本医師会医学賞

安達恵美子 (昭37)

祝 叙 勲

平成12年秋叙勲

勲三等旭日中綬章

中島 博徳 (昭23)

勲三等瑞宝章

櫻井 信夫 (昭24)

勲五等瑞宝章

池 二郎 (専19)

叙勲、褒賞その他祝事に関係された方は是非同窓会事務局までご一報下さい。編集部でも絶えず注意しておりますが、ニュースに接し得ない事態もあります。お喜びはなるべく早く、同窓の皆様にもお分けしたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

(一面より)

関心のある方はみることが
できることになっておりま
すが、関連する講座の教授
には特にご留意いただくよ
うに配布しているわけです。
今年度に入ってからもち
に300以上の応募書類を取り
扱っております。これらは
研究教育機関として当然の
活動であります。これ以
外に関連病院への医師派遣
にも積極的に関与すべきで
あるという指摘が以前から
ありました。これまで関連
病院への医師派遣は医局単
位に比較的行われてお
り、渉外委員会が関与す
る機会が少なかったという
事実があります。しかしな
がら最近そのような事情が
少しずつ変化しているよう
です。千葉大学医学部の関
連病院は、その多くが、厳
しい医療経済状況下であ
ることも地域社会から期待
されている病院であります
が、その機能を発揮するた
めに病院長の指導力が大き
な影響を持つことは容易に
理解されることです。その
ような背景をふまえて、病
院の経営母体から千葉大学
医学部にそれぞれの病院に
適切な院長を推薦して欲し
いという依頼が来るように

なりました。外務委員会人
事部会ではそれぞれの依頼
に応じて医学部内外に適切
な人材を求め、審議し、推
薦致してきました。その結
果、平成10年には千葉県立
東金病院長として平井愛山
先生(昭50)、平成11年には
千葉県立佐原病院副院長と
して竜崇正現院長(昭43)、
平成12年には鴨川市立国保
病院長として林宗寛院長
(昭60)、さらに埼玉県厚生
連幸手総合病院長として井
坂茂夫院長(昭51)を推薦し、
実現しました。これらの過
程で、それぞれの関連病院
が医学部にとってどのよう
な位置づけができるかが討
論され、卒後教育、卒後研
修の観点からみても医師側
の多彩な要望に応じるため
には、必要な病院である
という認識に至りました。今
までの長い歴史で、関連病
院は医学部各講座あるいは
診療科毎に系列化しており
ました。しかし大学病院で
の診療体制そのものが、臓
器別・疾患別・機能別に診
療科を再編してはという構
想の検討対象になる時代で
あります。従来のような形
での関連病院の支援はお互
いに十分な成果を挙げづら
く、医学部全体として支援
する形に変わってくると思
われます。医学部にとって

も特色ある短期的、長期的
卒後研修プログラムを関連
病院群と共有することが必
要であろうと思います。実
際に、前述した病院では新
しく赴任された院長の下に
病院としての基本方針の確
認、それに基づく診療体制
の見直し、改革が実行され
ており、早くも地域住民、
経営母体あるいは管理者か
ら上々の評価を得ていると
ころもあります。本号に広
告が掲載されております埼
玉県厚生連幸手総合病院は、
本年7月に井坂院長が赴任
したばかりであり、現在、
改革、再建の途上であり、
学内・学外を問わず人材を
求めています。是非ご検討
いただきたいと思います。
話題が少し変わりますが、
学問の最先端を競ってま
ます専門分化する大学病院
や高度機能病院で活躍して
いた医師も一旦大学病院等
を出る状況になったとき共
通に覚える不安は、一体、
自分は現場で幅広い診療を
行える医師として通用する
かという点ではないでしょ
うか。専門領域以外に知っ
ておくべきことを修得する
機会が必要です。そのため
に必要なソフトウェアイン
グのためのソフトとハード
をそろえることも医学部及
び関連病院を人事面から活

性化するためには必要であ
ろうと思われる。外務委
員会人事部会の課題として
そのようなことを考えるべ

附属病院 ニュース

病院長 山浦 晶(昭40)

医学部付属病院の主な出来
事(H12・8月・12月)

9月7日 リスクマネージャー
研修会を開催

昨今、医療の安全対策は
病院において最も喫緊の問
題である。本院では7月1
日付けでリスクマネージャー
69名を発令したが、その第
1回目の研修会を開催した。
9月20日「医療事故防止の
ための相互チェック」実施
される。

この相互チェックは、医
療事故が多発し社会問題と
なっていることから、国立
大学病院長会議が自主的な
取り組みの一環として、各
ブロック毎の病院間で相互
チェックを実施しているも
のである。年度内にすべて
の病院で完了される。本年
度のテーマは、「与薬・輸
液・輸血・患者識別・検体
識別等」である。

本院でも9月20日に実施
された。東京大学と信州大
学から副病院長、リスクマ
ネージャー委員長他各部門

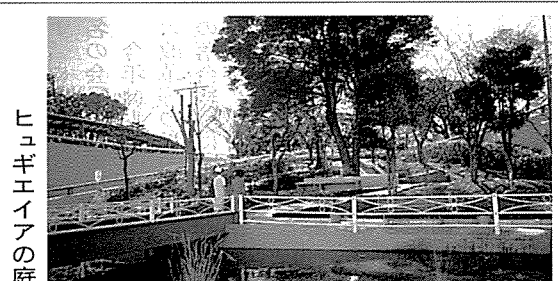
きであるという意見もあり
ます。これらについても同
窓の皆様のご意見をお聞か
せいただければと思います。

山浦 晶(昭40)

等から15人が来院し、病棟・
中診部門等を詳細にわたり
調査を行った。また、午後
からは、本院関係者及びリ
スクマネージャー等約100人
と安全確保のために活発に
意見交換を行った。

10月6日「ヒュギエアの庭」
竣工

患者サービスの一環とし
て病院中庭の環境整備を進
めていたが、磯野学長を迎
えて竣工式を挙行了した。



ヒュギエアの庭

毎日沢山の患者さんが訪
れ、爽やかな空気を胸に
ぱい吸って気分転換を図
っている。気分一新するこ
とで療養の面からも早期回復
が期待される。庭の名を募
集したところ200件以上の応
募があり、それらを参考に
「ヒュギエアの庭」とし
た。ヒュギエア Hygienic
はギリシャ神話において、
医術の神アスクレーピオス
Asclepiusの娘で「健康の
女神」である。ここに憩う
方々の健康を願って、「ヒ
ュギエアの庭」と名付けた。
英語読みではハイジーン
に関連した英語のハイジーン
Hygiene は衛生学を意味
する。

10月11日 ボランティアへ
感謝状贈呈式

昨年8月からボランティ
ア受け入れを開始したが、
活動時間が100時間を越えた
4人の方々に病院長から感
謝状の贈呈を行った。

贈呈式終了後、病院長は
じめ病院関係者と懇談が行
われ、ボランティア活動員
から患者の視点から問題点
も提起され、有意義な懇談
会であった。

10月27日 院内コンサート
を開催

「千葉オルフェウスアン
サンブル」は見事なハーモ
ニーを奏で、また、始めて

の試みとして、本院看護婦・
財団職員によるコーラスも
あり、300名近い患者さんが
楽しい一時を過ごした。11
月10日には、東京芸術大学
音楽サークル「すみれ」に
よる、ふれあいコンサート
も開催した。患者さんはバ
イオリンの音色に魅了され、
また、みんなで歌おうのコー
ナーでは、「赤とんぼ」や
「川の流れるように」など
一緒に歌を楽しんだ。

人事異動

- 千葉大学
助教昇任
内科学第三
小室 一成(東大昭47)
(東大講師より)
- 形成外科
吉本 信也(昭和大院昭57)
(同講師より)
- 講師昇任
病理学第一
石井源一郎(金沢大平4)
(同助手より)
- 神経内科
新井 公人(金沢大昭55)
(神経内科学助手より)
- (神経内科学助手より)
- 桑原 聡(昭59)
(神経内科学助手より)
- 他大学
金沢大 学救急医学教授
稲葉 英夫(昭54)
(秋田大教授より転任)

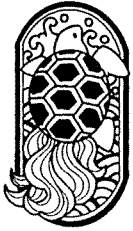
新年の挨拶

群馬県るのほな会 沖 真澄 (昭22)

同窓の皆様明けましておめでとございます。いよいよ21世紀という新しい年を迎える訳です。例年であれば新しい年を迎えて、新たな希望に燃える訳ですが、今年ばかりは何となく暗いイメージが先立つのはあながち小生が馬令を加えたばかりではなさそうです。今、政府は種々な部門で制度の改革を検討している様ですが、我々にとっては医療の問題がどうなるかが一番懸念される所だと思えます。制度の抜本改正が取り沙汰されていますが、掛け声ばかりで、とうとう最悪の状態を考えねばならなくなつたように思います。又、大学の改革も難航しています。果たしてどの様な方向へ持っていくつもりなのか気になる所です。私共にとり、同窓会の活動が重大な意味合いを持つものである事は十分肝に銘じているつもりですが、さて具体的に活動という事になるとなかなか私共末端にある者には名案が浮かんで来ません。当県では例年、会員の親睦をはかるために一回総会を行っているのですが、

集まるメンバーはいつも同じ顔触れになってしましました。本部が力を入れている地方支部の活性化、本部と支部との連携という命題にもあまり貢献出来ず申し訳なく思う次第です。今年こそは何か変わった事をやってみたいと念願するのです。笛吹けど躍ってくれないと本部でも張り合いがなくなる事を懸念して何とか本県での特色ある方式を考えたいと思っています。例えば、近隣県の「るのほな」会との交流の為合同して会合を持つ事も、一つの在り方ではないかと考えて居ります。実行となると種々問題がない訳でもありませんが。

いずれにしても新しい年を迎え従来からの支部活動の強化は、より一層力を入れて行きたいと考えて居ります。どうぞよろしくお願い致します。



るのほな会 埼玉支部 井上幸万 (昭27)

新年おめでとうございます。いよいよ21世紀の幕開けです。規制緩和、情報公開等々我々にとりましては、益々厳しい競争の時代に入るのではないのでしょうか。そんな時にこそ逆に心の寄りどころとして、協調と和が大事になると思われま

す。新年おめでとございます。会員は250名前後で、古くから開業なさっておられた先生方が、亡くなられて少しずつ減る傾向にあります。毎年8月の末に総会、講演会及び懇親会を開きます。これは、浦和、大宮、熊谷の順で行い、講演会の講師には、一人の先生には学内事情、もう一人の先生には学

千葉県のるのほな会 渡辺 武 (昭27)

二〇〇一年の年頭所感「さてどうなるか」

21世紀の年頭にあたり「明けましておめでとございます。」と声はずませて御挨拶!とはいかない「何か」がひっかかりま

す。ホーキング博士は地球温暖化によって、一〇〇〇年後には地球は滅亡と予告して他の惑星への移住を勧めています。また40年前の環境ホルモンについての警告の名著・沈黙の春(レイチェル・カーソン)につづく奪われし未来(シーア・コルボーン)でも20世紀では10万種以上の化学物質が無難作につくられ今のままでは地球があと2つ必要だとの発表もあります。一方、20世紀初頭では明

く奪われし未来(シーア・コルボーン)でも20世紀では10万種以上の化学物質が無難作につくられ今のままでは地球があと2つ必要だとの発表もあります。一方、20世紀初頭では明

術講演をお願いしております。この会には毎年40-50名の会員が集まります。今年は大宮の番で、医局の改革等の学内事情を外科の落合教授に、会場は大宮のパレスホテルに内諾を得ております。

埼玉には、埼玉医大、防衛医大があり、本学出身の教授、医局員が何人かおられます。又一昨年出来ました、医療福祉系の大学であ

ります。埼玉県立大学の学長も本学出身です。公的病院では、熊谷総合病院、幸手病院、大宮日赤、深谷日赤病院等に活躍されております。

各地区で開業された先生方も、それぞれ指導的立場の先生が多く居られ、県医師会には、副会長、常任理事として、県医師会をリードされております。以上簡単に埼玉の様子を

神奈川のるのほな会 富田 裕 (昭30)

早いもので、昨年二〇〇〇年を迎えるに当たって、コンピューター誤作動問題で右往左往してからもう1年たってしまったのかという思いです。昨年と変わって、皆様方には静かな新年をお迎えの事と存じます。さて、毎年年末になりま

す。その年のキーワードとなる言葉、Word of the Yearが話題になります。私は二〇〇〇年のキーワードはIT革命という言葉だと思っています。理科オンチと思われる森首相が「IT革命、エリートIT(イット)革命と言ったか言わなかったか。株式市場では日米共にIT関連株が暴騰したあと暴落する。等々ITに振り回された一

述べてきた様に思います。思えば数千年来人類が使ってきたITは基本的には活字であつたわけですから、IT革命とはこの活字文化から転換という、単なる技術的なことのみでなく、文化にかかわる事ではないでしょうか。新しい世紀でITは又々どの様に発展するのでしょうか。私の様に活字文化にドップリ浸った人間にはいささか気にかかる所です。

しかしとにかく、世の中は変革の時、遅れることは許されません。エッチラオッチラついて行こうと思っております。本年も又、神奈川のるのほな会を宜しく御願ひ申し上げます。

山梨ののはな会

佐々木芳岡(専19)

一昨年眼内レンズ(両眼)を入れた元気な老婆(77才)が久しぶりに来院した。なんとなく沈んでいるので、どんな具合ですかと尋ねると、「眼が大変疲れて、時々眼球が痛くなり何も出来ませんので、何時も眼を閉じていたい程です」とのこと。昔は和裁の先生だったが、今は仕事は止め毎日テレビを2〜3時間と、老人ボケ防止に最適と言われ、孫と一緒にコンピュータゲームを2時間ぐらいするとのこと。

早速眼底を初め諸検査を行ったが特別な所見は見当たらないので、テレビは3メートルぐらい離れて1時間程度にして、コンピュータは中止し、外歩きを1時間ぐらいなさるよう指導したところ、「私もこんなによく見えているのにおかしい」と思っておりました」とて急にニコニコして帰って行きました。これが今話題のIT性眼精疲労(テクノストレス)かと思われるが、こんなお年寄りにまでIT御利益が普及しているかと痛感した。今、世界各国はIT革命の進行により従来の国家観念を変えつつある。即ち眼には「見えない財」情報シ

信州ののはな会

熊谷信夫(昭28)

明けましておめでとうございませう。二〇〇一年の年頭にあたり、同窓の諸兄弟が健康で良い年を迎えられたことと慶賀申し上げ、また「ののはな同窓会」の運営にとっても良い世紀の始まりになることを願うものであります。

さて、近い将来に具体化されるといわれる、大学の独立行政法人化、大学院移行さらに従来の教室の統廃合問題は新時代における医学部を含めた千葉大学の進むべき方向を決定するものであり、このことについては大学当局の努力は勿論ですが、大学と表裏一体である同窓会の協力と努力が必要であると考えられます。そしてこれに対応するためには会員一同の協力態勢を作りあげることが、今世紀初頭の同窓会の最大の目標となります。

静岡県ののはな同窓会

野末道彦(昭33)

明けましておめでとうございませう。ののはな同窓会の皆様、21世紀の初頭、良き新年をお迎えになったこととお慶び申し上げます。ののはな同窓会静岡支部の会長は、長い間中村武先生(昭20)が務められていましたが、平成10年度から私が引き受けております。

静岡県には開業されている先生方はもとより、県下の多くの病院に赴任あるいは出張されている同窓の方々がたくさんおり、現在その数は約230名となり、それぞれの場所で大活躍されております。

定です。

2年という方も少なくありません。それでも多くの方々が県全体あるいは各地域のののはな会の行事に参加され、支部の活動の活性化に一役買ってくれています。

また浜松医科大学に看護学科が開設されたことに伴い千葉大学看護学部出身者が多数赴任され、医学科の基礎教室にも千葉大学に在席された他学部出身の先生方がおられます。同じののはな地区の出身者というところで敢えて学部の違いは問わず、静岡県支部会員として参加していただき、いろいろな行事に協力をお願いしております。

県支部の活動としては2年に一度の総会が主体でしたが、同窓会相互の連絡を密にして親睦を深め、県支部の更なる発展を期待して平成10年度から「ののはな静岡」という会報を年2回発行しております。支部の行事の報告とともに、会員の動向に関するニュース、関連病院の現況報告、自由な投稿記事など多彩な内容となっております。徐々に充実したものになってきました。千葉大学に限らず同窓会離れの風潮があると言われるますが、同窓であることの意義が分かるような活動をして行かなければその傾向は変わらないでしょう。総会や支部会報の発行などを通じて会員諸氏にとって役に立つような支部を目指したいものです。

千葉大学、ののはな同窓会ならびに会員の21世紀に於けるますますのご発展とご活躍ならびにご健勝をお祈り申し上げます。

四国ののはな会

小越章平(昭36)

私は高知に赴任して早いもので二十年になるが、近頃先生(昭44)と山本日出樹先生(昭50)の呼びかけで始めて四国全体のののはな会が発足した。



平成12年4月開催の第1回目の会合の様子は同窓会報の昨年最終号に載ったばかりである。先ず両先生により名簿作りから始まり、結構の人数がいることが判った。始めての会合は高知市内で名物の皿鉢(さわち)料理を囲んで行ったが、合計14名が集まってくれた。四国は名前どおり四つの県からなり、隣の県に行くのになかなか時間が掛かった。例えば、高知から、お隣の徳島県に行くのも急ぎの時は飛行機で大阪に出て、また飛行機で徳島に出る方が時間的に早く、私自信も何回か経験があった。しかし、最近四国4県が高速道路で結ばれ、そのようなことは過去の笑い話となった。また、現在は瀬戸大橋、明石大橋、最近の広島からの「しまなみ海道」と、3本の大橋で本州と結ばれ、益々交通の便も良くなったが、遠くにいて卒業後かなりの年数が経っていても、各人各様母校の動向は気になるものである。最近講演に招かれて久しぶりに千葉駅前に立った。我々がいる時にモノレールを大病院院近くに通す話があった。騒音などを懸念して当時の教授会は反対し、今のルートに決まったという。大阪大

学の病院を最近訪れた。雨にも濡れずにモノレールから、病院に入れる。現在の立場上、執行部は将来に憂いを残さないような選択をしなければと、少しグロテスクな千葉駅前を見上げて思っ

九州のものはな会 谷川久一(昭32)

21世紀を迎えるにあたり、九州の地より年頭のごあいさつを述べさせて戴きます。九州の地に以前、当地のものはな同窓会があったかどうか定かではありませんが、今日の九州のものはな会、古寺秀喜(昭22)、西高広(昭23)、田代豊一(昭24)の諸先生ならびに谷川久一(昭32)を加えて福岡県在住の同窓の先生が発起人となって第1回の会合を昭和55年に持ち、その後20年余の歳月が過ぎ、今日に至っております。その間、本年第16回の会合を持ち、また九州のものはな会報を昨年5号を出版し、本年6号を世に出す予定になっております。

た。今後は四国各県を時計回りに、次回は愛媛が当番になり早々に道後温泉での開催希望が多かった。会員の平均年齢が高いせいかもしれない。

中先生はいつも若々しく、私共を叱咤して下さいました。現在では新たに産業医大の寄生虫学・熱帯医学の教授として金沢保先生(昭55)が、長崎大の心臓血管外科の教授として江石清行先生(昭57)が赴任されたのをはじめ、若い方々も九州に少数来られております。私が当地にまいりました昭和39年頃は、九州は、千葉からみると大変遠い地で、私の開講6周年の折において下さった中山恒明先生から、お前は「まだ地の果てにいるのか」と言われたことを記憶しておりますが、現在では私自身この十数年は、今に至るまで平均週1回東京を往復しておりますが、遠い地にいるという感じがなくなりましたのは、1時間余で東京まで行くことが出来るからでしょう。九州の地は、食べ物も美味で住み易い所ですし、私自身の専門である肝疾患が

本邦で最も多い地というところもあり、仕事がしやすいかと思ひます。どうぞ同窓の先生方も、九州の地にどんどん来て戴き、また学会などでおいでの際は、どうぞ御連絡下さい。千葉大学ならびにものはな同窓会のみますますのご発展を祈念致します。

るの は な 同窓会 総会の御案内

日時 平成13年6月23日(土) 午後3時より
午後5時より
場所 ベリエホール(千葉駅ビル5階)
なお、千葉県ものはな会総会は、ベリエホールにて午後2時30分に開催いたします。



開催予定の行事をお知らせ下さい

学会、研究会、ものはな会、クラス会など種々の行事開催予定とその内容について同窓会事務局へお知らせ下さい。本会報に掲載致します。なお、本会報の発行月は1月、5月および9月です。

るの は な 随 想

千葉大学医学部同窓会

るの は な 会 の 変 遷 と そ の 雑 感

貫 洞 一 夫 (昭22)

千葉大学医学部の同窓会 東京のものはな会長を平成12年6月総会にて退任したので、この際、医学部同窓会の過去の變遷を、私の知り得る限りの知識の範囲でまとめて記述しておきたいと考えた。

千葉大学同窓会ものはな会

一方各県で作っていた全国のものはな会も、昭和15年7月6日、解散総会を開き、そこで昭和15年7月27日千葉に於いて、同窓会総会を開催し、両者は統括され、合同同窓会の新会則も議決された。

又昭和24年千葉大学発足後は、千葉大学医学部同窓会ものはな会として今日に至っているわけである。

千葉大学医学部ものはな同窓会会報も、昭和27年9月、小林龍男教授他8名の編集同人によりB5判32頁の創刊号が発刊された。(八十五年史、百周年史参照)

千葉大学医学部同窓会東京ものはな会の進展に就いて私が若い頃の東京ものはな会、鈴木佐内先生(武蔵野療養院長 大正9)や加藤峯三郎先生(江戸川病院院長 大正13)が会長として運営されていた。

特に鈴木佐内先生は、東京都医師会副会長、東京都議会議員、又、日本結核療養所協会副会長として、

又多年に渡り東京都診療報酬支払基金医科審査会委員長として多方面に活躍なされ、千葉医大の卒業生は色々世話になった。又鈴木先生の同級生の高嶋克巳先生(大正9)は、武見太郎日医会長に信頼され川名正義(昭5) 日本医師会代議員、議長、嶋田宗之(昭9)の日本医師会の広報委員長と共に多年に渡って日本医師会で活躍された。又後藤秀倫先生(昭10)は、東京都医師会の副会長として、木村玄洋先生(昭3)は、東京都医師会理事として千葉大同窓の為に尽力した。昔の良き時代の先輩群を思い出す。

従って諸先輩に勧められて出席した当時の東京ものはな会同窓会は、築地の「治作」の大広間で膳の席で行われ、「若い者近う近う」という関係で、我々若輩と先輩の間には隔たりがあった。

或る時、松村爽先輩より大塚文郎先生に紹介された。大塚先生は千葉医大創立直後に近い昭和3年の卒業生である。

前述の様に、同窓会の推移も多難であり、同窓出身の教授の少なかった時代の卒業生である。従って独立精神の強い方で、実力主義

を主張した。大塚先生は、かねがね同窓会とゆうものは、宴会政治や、権威主義を廃し、明朗で活発な組織と機構の上に運営されねば成立しないと考えている方であった。従来より連綿と続いた仲良しクラブの医専時代の同窓会から早く脱皮したいとの思い込みも強かった。

大塚先生は久保田正助先生(昭13)、松村爽先生(昭14)、伊東宏一先生(昭23)、河合正計先生(昭26)、貫洞一夫(昭22)、その他若干名を、杉並浜田山の大塚病院に召集し、前述の様な同窓会に対する意見を述べられた。

多少軍人氣質も感じられたが、屢しば合会を開き、その際の個人出費には先輩達も感じ入り、その熱意に報いるべく我々も多いに協力、努力した。

先ず東京ゐるのはな会の会則を制定し、組織機構造りも着々と行ない、都内を六部制として支部長、理事、幹事を選出した。

運営に際しても活発な遠慮の無い発言の為、時には口論になる事もあり、銀座で気分直しもあった。松村久保田両先輩の調整の下、伊東宏一君の若い実行力で東京ゐるのはな同窓会は動き始めた。(昭39年4月)

大塚先生は、突然昭和43年自ら全国会長となった。昭和43年大塚会長時代

○東京ゐるのはな会は六部制(昭39年)

○千葉学内支部(小林龍男 常任理事を支部長として昭和42年誕生)

○千葉県ゐるのはな会(船橋、木更津、君津、佐原、香取、館山、安房、夷隅、の各支部)

この際の暗黙の了解事項として今後全国会長は、千葉と東京より交互に選出される事となった。

それ故、大塚会長病後死後は、約束通り会長は千葉にゆずり、私共は第一線より退いた。

その後東京ゐるのはな会は、次のように、会長とカッコンの役員がそれぞれ核となって運営された。昭和46年故嶋田宗之会長(昭9)「故松村爽(昭14) 故伊東宏一(昭23) 落合和雄(昭18) その他」

次いで故中村民比古会長(昭13)「笠川猛(昭22) 山上健次郎(専17) その他」次いで故永井義三会長(昭16)「村田晴源(昭23) 大池和裕(昭24) その他」

次いで昭和63年名尾良憲(昭13)会長の登場となる。名尾先生は都立豊島病院長、三葉病院長辞任後は、

東京都社会保険診療報酬支払基金の医科審査委員長を永らく勤められ同窓会内でも知らない人はいない。その上中山恒明先生の推挙で、東京女子医大、消化器病センターの客員教授となり後輩の指導も行った。

その先生が、「貫洞君が副となり援助してくれば、東京ゐるのはな同窓会長になる」と言うのである。

名尾先輩や故松村先輩の発言は、中々断り難く、しぶしぶその条件を受ける事にした。

東京ゐるのはな会長名尾良憲先生の下、私が副会長となつて役員構成も組織も完了した。

ところが、更にまた一回転する。

「長い間千葉から離れていた関係からも再三固辞してまいりましたが、ゐるのはな同窓会長小林金市先生を始め多くの方々からのたつてのご要望にもだし難く、お引き受けした次第であります」のお言葉通り突然、全国会長を引き受ける事となり、又名尾先生の命により私は全国ゐるのはな会の副会長も兼任する事となった。文字通り名尾会長の秘書役となった(ゐるのはな同窓会報95号、ゐるのはな同窓会長就任して)。

平成3年再任の際、一期目は、未だ改善策が一向に実行しない事を反省し、辞任を取りやめ早急に改善策を実現するとの条件で、又一期再任する事となった。

平成3年11月ゐるのはな同窓会報に発表してある通り、編集委員長は井出源四郎副会長、岡本昭二教授副編集委員、嶋田裕教授、編集委員で新発足する事となった。

編集委員会改組以来休刊していた同窓会報は順調に発刊され、ページ数も内容共に増加し、情報も次第に充実して、全国の会員も満足するまでになった。又会長の下、千葉大学ゐるのはな会、東京ゐるのはな会、千葉ゐるのはな会より副会長三名を決定した。

平成4年2月19日前医学部教授萩原彌四郎氏を参与に推薦承認を得た。

平成4年7月、関東ブロック(8県)に常任理事及び代行一名ずつを各県より増員(総会承認)した。

平成5年2月17日常任理事会に於いて、故岡本昭二教授を参与に推薦承認された。

平成7年6月24日同窓会総会に於いて大藤正雄教授の参与就任が承認された。

この様に役員の増員整備に努め、一方全国会員に対

する情報伝達を計るためのゐのはな会報も、編集委員の努力により次第に充実し、同窓会員間の親睦発展も進み行しつつあり、二期目もまっとうしたので、「この際全国会長を辞任したい」との名尾先生の発言があった。

それで東京ゐるのはな会としては、「千葉選出の井出源四郎副会長は、気心も知れているので推挙したい」と私が述べると理事会全員の賛成を得る事が出来た。

井出新会長は、名尾会長の方針を熟知しているので、それを発展せしめ、各種事

業を新設拡大整備せしめた。井出会長の哲学や独特の思想の流れる仕事ぶりも、充分に拝見させて頂いて、感ずる処多かった。

名尾会長辞任後、軸足を東京に移してほつとしていたが、東京ゐるのはな会会長の加納六郎先生の突然の発病人入院の為、私は残任期間の会長に就任する事になった。(超法規的判断として理事会承認)

これは大変な事だ。井出源四郎会長が辞任したら今度は東京の番だ。私は心臓術後七年を過ぎて自分の健

康に自信が無い。平成12年6月は役員改選の総会である。6月の総会には、会長を辞任し、長澤副会長にお願いする事にし、本人の了解も得て、本年6月の総会にて長澤先生は、会長に就任された。

今後私は、東京ゐのはな会名誉会長として、陰ながら助力をしたいものと考えている。又、加納六郎元東京ゐのはな会長は、本年9月17日逝去された。

多年のご尽力に感謝すると共に、謹んでご冥福を祈ります。

準備を進めております。研究内容は、化学物質、特に「内分泌攪乱物質(いわゆる環境ホルモン)」の生殖系や次世代への影響をメインテーマとしており、ヒトの疫学調査、ヒト胎児の化学物質曝露アセスメント、化学物質の胎児移行のメカニズム解析、内分泌攪乱物質の作用メカニズムの解明、精子形成障害や先天異常(停留睾丸等)の発生メカニズムの検討、化学物質の影響判定の先行指標であるバイオマーカーの開発、化学物質の体内蓄積の削減を目的とする予防・治療法の検討などです。研究手法は、従来からの肉眼解剖的

教室だより

解剖学第一講座(細胞生物学)

解剖学第一講座は、千葉大学医学部の前身である千葉医科大学において40年に小池敬事教授が初代教授となられてから、草間敏夫教授、福山右門教授、嶋田裕教授と引き継がれ、平成12年4月より五代目の森千里が担当しております。

現在、当教室は、門田朋子助教、豊田直二講師、小宮山政敏助手、櫻井健一助手(期間限定)、ポスドク2名、大学院生3名(内1名はパキスタンからの留学生)、技官2名、事務補佐員1名、技術補佐員3名の総勢16名が研究・教育を行っております。研究の方向性としては、これまでの解剖学教室のテーマを少し方向転換し、21世紀を見据えて、発生学・解剖学を基盤とした環境生命医学をテーマとしております。そのため、大学院大学へ向けての新しい講座名を「環境医学講座(環境生命医学分野)」として

方法、光学顕微鏡や電子顕微鏡を用いた手法と分子・免疫組織学的手法を用いた形態学的アプローチ、発生・生殖毒性学で用いる検討方法、さらに、発生工学や分子生物的手法などを幅広く用いています。

現在のところ、新しい研究体制が立ち上がって一年足らずのため、教室内の研究システム作りを重点を置いています。しかし、環境生命学という分野は、新しく、かつ非常に広範なポータルレスの研究分野であり、今後は千葉大学内の基礎医

学や臨床の教室、さらには薬学部の先生方とも広く連携を保ちながら、活発な研究活動を続けたいと思っています。

医学部学生に対する教育は、肉眼解剖学と人体発生学を担当としています。しかし、献体を用いた実習が大きな部分を占めることもあり、医学部学生には単に教科書の勉強では学ぶことのできない生命の尊厳を学び、献体者の心を理解してもらいたいと思い、医学知識の面以外の教育にも取り組んで行こうと思っています。



す。

さらに、大学院生の教育では、研究者として必要な以下の5つの点を重点的に指導して行きます。まず、第一に発想(何を明らかにしたいのか)、第二にその発想を証明するための実験計画の立案、第三に系統だった実験・調査の実行、第四に得られた結果に対する考察とそれらをまとめあげての論文作成、第五番目にスピードです。これらの五つをマスターし、学位取得後は、国内外で活躍できる研究者となっていくことを願っています。

さらに、医学部学生や大学院生の教育のみならず、環境問題に対する市民公開講座を定期的に主催し、国立大学の使命である社会のニーズに応えるための地域教育にも力を注いで行く所存です。

「環境」というキーワードが重要視される21世紀において、解剖学と発生学を基盤とした「環境生命医学」の必要性は益々高まると考えております。そのため、若い医学生や研究者がこの方面に積極的に進まれることを強く望んでおります。

最後に、歴史ある解剖学第一講座(環境医学講座環境生命医学分野)をますます

す発展させていくために鋭意努力してまいりますので、るの は な 同窓会の皆様には、

生理学第一講座

(認知行動生理学)

ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

教授 森 千里

歴史から紹介するには紙面がたりないので詳細は「千葉大学医学部八十五年史」にゆずるが、当教室は、酒井卓造教授・鈴木正夫名誉教授・本間三郎名誉教授をへて現在にいたる。古くから電気生理学を中心として研究をすすめて、今日にその流れを伝えている。現在、教室では、(1)ヒトにおいて双極子追跡法に独立成分分析などを用いて脳内の電源発生位置を推定し、てんかん・高次機能・情動解析に活用 (2)コヒーレンス・伝達関数・スペクトル解析・独立成分分析・非線形解析法を用いて、脳電図における認知機能・言語理解・記憶の時間経過の解析 (3)微小電極法によりヒトの体性感覚のメカニズムの解析 (4)微小電極法による血圧調節における自律神経の解析

(5)骨格筋の動態力学を電気生理学的に解析 (6)聴覚機能をネコの細胞レベルで解析 (7)ネコで呼吸の脳幹内神経回路の解明 (8)ネコの発声における脳幹内神経回路の解明 (9)ヒトの痛みにおける受容器・末梢神経のメカニズム解析 (10)ネコの排尿における神経回路の解析 (11)胃電図の発生メカニズムの解析 (12)fMRIによる言語機能の解析 (13)腰痛発生メカニズムをラットにおいて解析 等を押し進めている。

以上、ヒトの生体機能を各方面からアプローチし、今後、心理学的手法も加え、fMRI、脳磁図等をさらに増やして、解析法にもカオス・フラクタルなどの複雑系をふくめて、ヒトに役立つ生体機能の解明を推進したい。

教授 中島祥夫

生理学第二講座

(自律機能生理学)

本講座発足以来の歴史、人事等については、すでに「千葉大学医学部八十五年史」(昭和39年刊)、「千葉

大学医学部百周年記念誌」(昭和53年刊)、「千葉大学30周年誌」(昭和55年刊)、「千葉大学50周年誌」(平成

11年刊)に記載されている。

本講座は、昭和27年に開設された。明治時代の本学部の発足以来、生理学は1講座のみであったが、戦後の新制大学院発足に伴う拡充のため、昭和27年に2講座制となった。以来、生理学第一講座は主として神経生理学(動物性機能生理学)を担当し(現中島祥夫教授)、第二講座は循環・呼吸・内分泌などの自律機能生理学(植物性機能生理学)の教育と研究を担当している。初代の故福田篤郎名誉教授(昭和27年、昭和48年)は、ストレスに対する内分泌および循環の応答を主な研究テーマとし、併せて本邦における初期の高血圧疫学調査なども手がけて多くの成果をあげた。第2代の本田良行現名誉教授(昭和49年、平成4年)は、金沢大学医学部から赴任し、本講座を日本における呼吸生理学研究の中心的な拠点に発展させた。さらに、基礎研究のみならず、常に臨床や関連領域、さらには外国との共同研究を推進し、本講座を名実ともに世界における呼吸生理学研究の中心の一つとなした。本田名誉教授のおかげでは、現在も第一線の研究者として活躍しておられる。

第3代は福田康一郎が就任した(平成4年)。呼吸・循環生理を軸に基礎的・病態生理学的な観点から、各教員が自主的に研究を展開しており、顕著な成果をあげている。現在は、林文明助教授が呼吸中枢を中心とした神経性調節に関する基礎的・病態生理的研究を行っている。また、桑木共之講師は遺伝子欠損モデル動物などを用いた循環・呼吸・自律神経機能の解析を行い、新たな成果をあげている。さらに、麻酔学教室(現西野卓教授、元生理学第二講座講師)との交流人事で、麻酔学教室出身の下山恵美助手が疼痛の病態機序と治療のための基礎的研究に従事している。各教員は大学院生の指導にあたり、ともに、他大学等の研究者とも活発な交流を行っている。また、非常勤講師(吉田明夫医博、吉崎英清医博)を中心に、重力の人体呼吸・循環動態への影響を検討している。中村巨技官は実験室の改善、機器等の試作および事務処理を一手に引き受けており、また、熊谷知加子が実験動物の管理にあたりっている。

本講座発足以来の特徴は、臨床各教室との協力や病態生理学的な研究テーマに取

り組む姿勢を継承していることである。基礎医学教室の在り方として、臨床との関連および病態解明を重視しているからである。また、新しい実験・研究技術の開発にも精力的に取り組んでいる。これまでラット・マウスなど小動物の生理機能の測定は技術的にほとんど不可能であった。しかし、今後

これからの小動物が疾患モデル・病態解明の主な研究対象となることから、その生理機能測定技術の開発にも力を注いでおり、成果が注目を集めている。全国的に生理学教室における研究が神経生物学や分子生物学に偏っている弊害が指摘されている中で、今後も病態生理学領域の研究を推進す

ることが必要と考えている。本講座が担当する学部学生への授業は、循環、呼吸、消化・吸収、腎・体液、内分泌、体温調節や細胞生理など極めて多岐に渡っており、何れも臨床との関連が深い。したがって講義・実習も臨床との関連を重視している。実習は、血圧、心電図、運動、心エコー、肺気量、代

謝率測定、データ分析を中心とし、学生自身が被験者となって実施している。実習の技能試験も実施しており、臨床医学教育との連携に心がけている。教育に関しては、総力をあげてきめ細かく取り組んでいるが、教員数が少ないために負担が多いことも事実である。実習に際しては、本講座に

在籍している多くの臨床系大学院生が臨床経験をもとに、学部学生の指導にあたっている。現在医学部として計画中の大学院化に備えて、学部授業の内容を簡潔なコア・カリキュラムにまとめるとともに、他の講座等と協力してアドバンス・コース病態生理学特論を計画している。教授 福田康一郎

病理学第一講座 (分子腫瘍病理学)

病理学第一講座は、明治23年(1890年)に初代筒井秀二郎教授が病理学を開講した時に始まります。筒井教授は、コルタルをマウスの皮膚に塗布して皮膚癌を発生させる画期的な業績を発表され、多数の癌原性物質発見に計り知れない程の貢献を致しました。昭和2年に病理学が2講座制に移行されるにあたって、石橋蔵教授が初代病理学第一講座の教授に就任されました。その後、滝沢延次郎教授、井出源四郎教授、三方淳男教授と引き継がれ、1980年から張ヶ谷健一が担当させていただいております。今年で開講以来10年を迎えることになりました。

教室員は、教授1(張ヶ谷健一)、助教授1(北川元生)、講師1(石井源一郎)、助手2(岸宏久、東守洋)、技官2(梅宮敏文、東和彦)、の職員に、医員(川名秀忠)、大学院生、国内留学生、研究生を加えた総勢約20名です。日常の業務として、外科病理学、実験病理学、学生教育に重点を置いています。研究面では、腫瘍病理学、特に接着分子(CD44、イ



生化学第二講座は、故赤松茂教授ならびに三浦義彰名誉教授の御努力により、昭和42年に設置が認められ、翌昭和43年に橋正道先生を初代教授として発足しました。橋正道先生は、教室の基礎を築かれるとともに、研究面では、核酸前駆体ヌクレオチド合成と尿素合成の酵素機能を中心とした代謝調節について多くの業績を上げられました。

平成8年3月に橋正道先生が退官し、同年8月より鈴木信夫先生が第二代目の教授として就任されています。現在、教授を含めてスタッフ7名(うち非常勤職員2名)、大学院生9名(うち中国からの留学生4名、臨床講座よりの派遣5名)、パート職員2名の計

18名の教室員で研究と教育を行っています。また、教育学部医科学教室とも連携して教育研究を充実するよう努力しております。研究面では、ヒト細胞におけるサイトカイン・プロテアーゼを介する突然変異発生の調節という説を提唱し、それを検証するために、タンパク質、遺伝子の両側から多面的に取り組んでいます。また、最近では、外

因性内分泌攪乱物質(環境ホルモン)の遺伝子作用に関する研究や、宇宙フォーラムより依頼を受けた「宇宙環境下の遺伝子突然変異誘導のヒトサイトカインによる調節に関する基礎研究」を行っています。本年4月からは「環境汚染に適應するヒトの進化機能」という

プロジェクトも開始する予定です。これらの研究を通して、変異は必然的に起ることを立証します。従来の「突然」変異という概念を覆し、諸種の疾患の病因論や生物の進化についての考えを一変させることとなります。

教育面では、2年生を対象に、生化学の講義・演習を酵素学・代謝学・栄養学を中心テーマとして行っています。スピーチ、ディベート、ポスター発表等の種々の形式による学生主体の力

ます。教育面では、2年生を対象に、生化学の講義・演習を酵素学・代謝学・栄養学を中心テーマとして行っています。スピーチ、ディベート、ポスター発表等の種々の形式による学生主体の力

講師 喜多和子

いただき、ご協力を賜っています。病理実習の一環としてのCPCでは、肉眼的・組織学的な所見について学生が報告用紙を作成し、教官がチェックすることとし、病理学をより身近な学問として実感してもらえよう努力しています。また、最新の科学的な知見を実感してもらうためにセミナーを行い、その知見が病態にいかに関与しているかを指導しています。こうしたCPC、セミナーは、病理学が疾患の本態の解明を行うことを目的とした学問であることを学生に理解してもらうために、教官一同精力的に取り組んでいます。

現代医学は、基礎と臨床の垣根を越えて発展してきており、病態の把握、診断治療といった場面でも、基礎、臨床にまたがる知識を要求される病理医は、時代に即した重要な役割を果たさなければなりません。このため、病理学に携わる医

外科学第一講座 (器官病態学)

第一外科教室は第一高等学校医学部外科部門教諭として東京帝国大学より三輪徳寛先生が赴任された明治21年(1889)を始まりとし、一昨年(1999)に教室開講110

師は基礎医学を実践し、また臨床医学の場面では病変の確定診断を下し、診断治療の客観性を保つ上に重要な責任を担っています。また、これまで異なる専門分野ごとに個別に行われていた研究は、共通の技術や研究法を用いて多くの専門分野の研究者からなる研究集団がプロジェクトを組み、共同で研究する方向に向かっています。その中で、臨床医学と基礎医学の架け橋となる病理学は、医学生物学研究の場面でもますますその重要性を増しています。本教室では、こうした責務に十分対応できるよう、病理診断学・研究・教育のバランスの取れたより良い病理医の育成を目指し、努めて行きたいと考えております。のとはな同窓会の先生方のこれまでに劣らぬご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

教授 張ヶ谷健一

周年祝賀会が盛大に行なわれたことは関係皆様の記憶に新しいことと存じます。その後第2代高橋信美教授時代の大正15年第二外科教室が独立し、外科2教室制

となり名実ともに第一外科教室として発足しました。第3代河合直二教授は当時不治の病とされていた結核の外科療法で教室の名声を高め、昭和37年の肺癌研究施設の独立へ繋がりました。

現在の診療および研究活動は心臓血管外科グループ、胃・大腸を扱う消化管外科グループ、食道・脾臓外科を担当する栄養代謝グループ、肝・胆道外科グループ、乳腺・甲状腺外科グループの大きく5つの診療・研究グループに分かれ学会発表を含め活発な活動を行っています。各グループの主要テーマは心臓血管外科においては慢性肺動脈血拴塞症に対する外科治療(2000年11月24日に肺血拴塞症症ミレニアムシンポジウムを開催)、胸部大動脈瘤および超低体温循環停止法、消化管外科では直腸癌手術・放射線療法および胃癌に対する術前・術後化学療法、食道・脾臓(栄養代謝)外科では外科侵襲と免疫能の臨床・基礎研究および各種栄養法、肝・胆道外科においては肝門部胆管癌の臨床および閉塞性黄疸肝障害の研究、乳腺・甲状腺外科では乳癌での各種画像診断および細胞診などです。また海外留学

授が就任し、専門である心臓血管外科領域のみならず教室全体の診療、研究活動はさらに発展しつつあります。このような長い歴史を誇る第一外科の現行医局員数は教授以下165名、同門会会員数は680余名を数える大教室であります。また関連病

院施設は千葉県内、県外を合わせ50施設余りを数え、地域診療活動のみならず、外科医教育、修練研鑽の場としても教室、同門を支える大きな力となっております。

て2000年11月時点で11名(米国10名、欧州1名)を数え、多くの優れた業績を挙げております。

第一外科臨床研究室には千葉医学専門学校時代の手術室壁に書かれていたという、外科医は斯くあるべきを記した「獅胆鷹目行以女手」(Ein Doktor muss ein Fallenaue, Jungferhand und ein Lubenheze haben)の額が掲げられ教室の象徴ともいふべき物となっております。医学的知識・医療技術がどんなに進歩しても、高邁な精神はいつの時代を経ても不変と思われませんが、先に述べたごとく大学院大制度や独立行政法人化など千葉大学全体を含め、長い歴史の当教室にも診療科再編成など大きな変革の波が訪れようとしております。折しも、中島伸之現教授は本年3月をもって定年退官され、4月から次期教授予定者として宮崎勝講師が既に選出されております。110余年、一世紀を越えて築き、培われた第一外科教室が新世紀を迎え、これら大きな荒波を乗り越え、輝ける未来に向かって勇躍前進することを祈念・確信してやみません。

医局長 伊藤 博 (平成12年11月27日記)

精神医学講座 (精神機能病態学)

本学における精神医学(当時は精神病学)の最初の講義は明治21年(1889)4月であり、精神病室(当時の名称)は明治24年に前身である県立千葉病院に落成したことにより始まります。しかし、講座としては明治40年(1907)に開講した精神病学講座に始まります。初代教授は松本高三郎先生で、橋健行教授、荒木直躬教授、松本胖教授、佐藤壹三教授、佐藤甫夫教授と受け継がれ、現在は平成12年6月1日から伊豫雅臣が7代目教授として担当しております。

精神医学の進歩に伴いその診療対象や研究課題も変化してきております。そのような中、当講座は複数の分野で多くの優れた人材を輩出してきております。医学教育においてだけでも、精神医学では筑波大学初代教授小泉準三先生、2代目の白石博康前教授、山形大学初代教授十束支郎先生、帝京大学市原病院竹内龍雄教授、そして脳外科では筑波大学初代教授である故牧豊先生、神経内科学では本学の服部孝道教授、解剖学では慶応大学の川村光毅前教授、千葉大学看護学部教

授として故野沢栄司先生が挙げられます。まさに、精神医学が精神病学、脳病学と変遷を重ねてきた過程で、脳と関係する複数の分野で先駆者としてまたは指導的立場で活躍される方々が、この教室を経由されたことを意味していると思います。現在当講座では、主に臨床研究として画像診断法や遺伝子解析、また基礎研究として分子生物学的手法や行動薬理・生化学的手法を用いて精神疾患の病態解明に取り組んでおります。また近年精神疾患に対する治療薬が大きく変化してきており、臨床精神薬理学の重要性が増してきております。当教室においても動物実験や画像診断法、遺伝子解析を組み合わせていくことにより、より合理的な薬物療法を追求する研究を進めてきています。さらに、当教室では神経症の治療に関して、従来の力動的アプローチに加え、学習および行動科学理論に基づいた認知行動療法を適応することにより、治療成績の向上を目指しています。

精神疾患の成因には生物学的要因のみならず社会心理学的要因も含まれており

ます。現在精神医学には医療の分野から社会学的分野からも多様な要望が寄せられております。当講座では目の前の患者に最善の医療を提供し、かつ将来には

臨床検査医学講座

(病態検査学)

附属病院検査部

教授 伊豫雅臣

臨床検査医学とはきわめて多岐にわたる臨床検査(とくに検体検査)を検査の側から捉える学問ですが、その役割は病院検査部の管理・運営、新たな検査法の開発、異常値のメカニズムの研究、そして検査の診断効率の医療経済学的追求です。千葉大学においては昭和41年に附属病院検査部としてスタートし、初代部長は故降矢震先生(昭和46年より検査部教授)、そして平成元年9月から平成11年3月までは米満博教授が担当され、平成11年10月に赴任した野村が3代目です。また米満前教授のご尽力により講座化された臨床検査医学講座としては2代目になります。

教官は講座に3名(教授、助教、助手が各1)と病院に1名(講師)の計4名です。前任の米満教授は血液学が御専門で、同じく血液専門の菊野薫助手が平成12年9月をもって米国留学のため退職した後、腎臓病学・免疫学が専門の牧野康彦助手が第一内科より転任しました。腎・免疫関連の臨床検査に加えて、近年診断学の領域においても重要度が増しているサイトカイン、ケモカインと検査医学の接点を探っています。菅野治重講師は附属病院のインフュージョンコントロールチーム長を勤めると共に、検査部細菌検査室の指導にあたっています。また平成12年7月に着任した朝長毅助教は本学第2外科の出身ですが、米国で2回および京都大学理学部柳田充弘教授のもとで延べ8年間にわたり本格的に分子生物学研究を行っており、その経験

多型に基づく個体差・発症要因の違いという観点から、さらに続けています。臨床検査の広い領域をカバーする必要があるので、検査医学の教官のバックグラウンドは以上のように様々ですが、異なる領域の研究者のディスカッションの中から思いがけない接点やあらたなテーマ・方向性が見出されることも多々あり、各々の力を結集し、大学院生をさらに増やししながら、今後さらに発展させたいと考えております。

学生教育における講義は従来4年次の内科学のなかで17コマと内科総論の一部を担当していましたが、平成15年度からの新カリキュラムでは臨床検査医学として1ユニットを担当し、検査の診断効率など総論的な事項、腫瘍マーカー、自己抗体、遺伝子診断など各科に横断的な事項、各論では将来どの診療科にいつても求められる臨床医にとっての検査の minimum essential tests (例えば健診データの読み方など) について系統的に扱う予定です。

学生実習は5年次の臨床実習開始直前に、採血実習、尿沈査、細菌関連検査、そして最近急速に普及しているPOCT (point of care testing) など基本的事項を指導しています。私は検査医学講座と病院検査部は一体であるべきと考え、千葉大学においても医学研究科が事実上昼夜開講型になったことを機に、当院検査部に勤務する臨床検査技師を講座の大学院生として積極的に受け入れることとし、現在1名が(4月からは計2名に)在籍しています。この方針にご理解を頂いた山浦病院院長をはじめ関係の皆様御礼申し上げます。

病院検査部は部長(講座教授が兼任)、講師として大澤進技師長以下総勢50名の臨床検査技師が勤務し、年間検査件数が300万件を越える生化学・免疫、血液、尿・体液、細菌の各検体検査室と生体機能検査室からなっています。降矢部長時代の昭和56年には全国に先駆けて検査部のシステム化が確立され、米満部長時代の平成10年には大型の自動検体搬送システムが導入され、検体検査の能率が大幅に上昇しました。

平成12年4月からは検体検査の日直・当直(24時間体制)を開始し、13年4月からは輸血部の夜間のクロスマッチ業務も検査部の当直体制のなかで行うべく準備を進めています。人員の増加は望み得ない現状ですが、各人の努力の結果、外注検査項目や従来ELISAなどで行われていた項目を積極的に検査部内に取り込み、この1年間で計26項目の測定を新たに開始しました。今後も絶え間ない医学の進歩に合わせて、新たな検査を積極的に採用するとともに made in Chiba の新しい検査法の開発にも取り組んでゆきたいと考えます。また我が国にも導入される可能性があるDRG-PPSにおける検査の取捨選択には Evidence - Based Laboratory Medicine が必須であり、検査の診断効率に関するデータ作りも進めています。

当面の課題の第1は遺伝子検査室を充実させることとあります。遺伝子検査については白血病におけるキメラ遺伝子解析、HIV-RNA定量などを新たに開始しましたが、さらにHCV-RNAなど日常診療上必須の項目をまず導入する予定です。比較的古い疾患の遺伝子診断については各施設が得意科目を持つことによる遺伝子診断の全国ネットワークを立ち上げる計画が以前よりあり、我々も参画する予定ですが、遺伝子解析研究に係る倫理問題への対応のための指針とのかねあいが、進展していないのが現状です。いずれにしろ、病院内の遺伝子診断の体制づくりが急務であることは間違いなく、検査部も全面的に協力したいと思っております。

第2には次期システムにおけるオーダリングの開始に合わせ、診療側からの御要望が強い生理検査部門の中央化であります。この問題については各診療科のお



考えが異なり多大な調整と決断が求められると予想されますが、皆様方のご助言・ご理解を頂きながらぜひ実現させたいと思っております。

第3には検査部から異常情報報を積極的に発信し診療支援を行うことであります。そのために「clinically-orientedな検査技師を育成することが急務と考えます。私も含め検査部の教官は内科の専門外来に加わる場合

卒後・生涯医学臨床研修部

卒後・生涯医学臨床研修部(本部)は、地域の開業医や勤務医の先生方、及び卒直後の研修医の臨床研修を組織的、効率的に推進することを目的として平成元年5月29日に設置され、若新政史前教授が初代教授に就任されました。その後10余年を経て、平成11年4月より田辺政裕が本部を担当することになりましたが、

社会の急激な変動と共に医療を取り巻く環境も変化し、本部の役割も多様化してきました。卒後のみでなく、卒前から生涯医学教育までの一貫した医学教育、教員教育(Faculty Development, FD)、地域医療、学際的な生涯教育等に対する

が全国的にみても多いようですが、病院全体の検体が集まり、しかも異常値にいち早く接する部署である検査部の特色をいかした診療体系を作り上げていきたいと考えております。課題は山積しておりますが、教官・技官が一丸となって邁進する所存ですので、学内外の同窓の皆様方にはご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

スパーローティット研修(B, Cコース)を導入したことです。1年目は各コースとも共通に専攻科研修を受けますが、2年目、Bコースは原則的に本院で内科系、外科系、小児系、救急系をそれぞれ3ヶ月ごとローテーションし、Cコースでは学外の臨床研修指定病院で1年間のスパーローティット研修を行います。平成13年度も同様のプログラムで既に募集を開始いたしました。

貢献も期待されています。現在は、教授1名、事務官1名ですが、体系的に医学教育を研究・実践するセクションとして今後の役割を考えています。

本院の関係する生涯医学教育としては、地域の医師が最新の医学知識、技術を体験習得するリフレッシュ教育とオープン化し紹介患者の診療を本院の医師とともに行う病診、病病連携があります。これらを推進するために「研修登録医制度」が平成元年に導入され、その窓口として本部が設置されています。さらに、本年度より「救急疾患のプライマリケア」というテーマで11月18日より来年の3月17日まで毎週土曜日午後本院の全診療科が担当して、日常的に遭遇する可能性のある救急疾患の診断、治療に関する最新情報を提供する講義を、各科の先生方のご協力により企画しました。今後とも地域の先生方を対象とした生涯教育プログラム

昨年度は、緊急の課題として卒後臨床研修必修化に対応した千葉大学医学部附属病院(本院独自の臨床研修プログラム(プログラム))作成に取り組んでまいりました。関係各教授並びに各診療科担当責任者の先生方の協力により、平成12年度研修医募集要項を昨年10月に本院のホームページに公開することが出来ました。プログラムの特徴は、従来の各料(このストレート研修(Aコース))と平行して、

を千葉県医師会と協力して企画していく予定です。平成8年3月に、臨床カリキュラム委員会が発足し、臨床チュートリアル、臨床入門、クリニカルクラックシップ、総合講義などの新たなコースの導入と従来の系統講義、臨床実習の改革が行われました。本年3月に新カリキュラムを初めて履修した学生を社会へ送り出すことができました。臨床医学教育の改革の継続と共に、学生の態度教育改革も必要で、今後は1年次から6年次までの一貫した学生の態度教育カリキュラム作成に貢献できればと考えております。

多くの教官は、医師となるために医学部を卒業して診療を行いがら指導者となってきました。しかし、学生、研修医を教育する能力に関する知識、技法を修得することは出来ません。医学教育改革を推進していくためには、教官、指導医が教育能力を身に付ける必要があります。このような観点から、医学部では平成8年より千葉大学医学教育ワークショップを毎年企画し、今年の8月に第5回のワークショップを生命倫理をテーマに開催しました。医学部、附属

分子生体機構学講座

病院いずれにおいても、教育はさらに重要になってくることから、FDなどの教育支援たい。教授 田辺政裕

分子生体機構学講座は、

1988年4月に医学部附属高次機能制御研究センターの大学院化に伴う改組により、高次神経分野から分子生体機構学へと名称変更して新生出しました。高次神経分野は1988年4月の高次機能制御研究センター開設と同時に脳・神経の高次機能の解明を明らかにすべく充足し、生物活性研究所薬理活性研究部を経て医学部附属脳機能研究施設の久我哲郎教授が講座を担当され、1990年3月に定年退官後、1991年3月より木村定雄が高次神経分野・分子生体機構学を担当しております。1995年3月に渡辺良雄助教授が定年退官、1995・1996年に依光一之が、1997・1998年は本間俊作が助手として在籍しました。

1999年10月より粕谷善俊が助教授として赴任し、諸井佳代子助手、西山真理子助手と共に、新しい研究体制のもとに教育・研究にあたっています。教育は生化学及び薬理学講義を一部担当、1999年より疾患を遺伝子と蛋白質の分子レベルで解明し、病態の理解と診断、治療、予防に貢献する事を目的とする医学の新しい枠組みである分子病態学講義を共同で担当しています。

研究としては、(1)血管作動性(生理活性物質の探索及びシグナル伝達機構、(2)血管の収縮弛緩の分子機構、(3)血管内皮細胞の構造と機能、(4)受容体の構造・機能とその制御機構、(5)細胞の分化・増殖における分子リ酸化カスケード、(6)中枢神経系におけるグリア細胞の役割の研究を行っており、(7)具体的内容は、1998年に発見した強力な血管収縮ペプチド、エンドセリンに焦点をあてた血管・内皮を中心とする循環器基礎研究を続けております。これまでに、(1)血管収縮に関与する新しいエンドセリン受容体サブタイプの薬理的解析、(2)エンドセリンB受容体欠損マウスを用いたエンドセリン受容体サブタイプの多様性に関する薬理学的研究、(3)エンドセリン前駆体からエンドセリンを産生するエンドセリン変換酵素の特性と

全遺伝子構造解析、(4)「 ET_1 」で前収縮させた血管にエンドセリンB受容体拮抗薬投与するとおこる ET_1 型の収縮の解析(2種のエンドセリン ET_1 ・ ET_B 受容体間における ET_1 の移動・再分布の解析)、(5)消化管平滑筋収縮調節機構におけるエンドセリンの役割、(6)小児外科と共同で行いました ET_1 receptor病におけるエンドセリンB受容体遺伝子の変異とその特性の解析、(7)エンドセリンB受容体の脱感作及び細胞内移行機構の解析、(8)血管作動性ペプチド受容体応答の制御機構の解析、(9)G蛋白質共役受容体キナーゼGRKs分子中のN末端部は新しい抑制ドメイン(RGS)を含み、Gqと結合してシグナルを抑制する、(10)心血管組織のG蛋白質シグナル調節蛋白質RGSの特性解析、(11)新規血管作動性物質の探索、(12)細胞内リン酸化酵素の情報伝達とその生理機能の解析(特にp38MAPキナーゼの生理的病態的な役割の解析)、(13)脳内グリア細胞の分化・増殖機構の解析を行ってきました。現在までこれらの研究に第三内科5人、皮膚科2人、泌尿器科2人、耳鼻咽喉科1

人、呼吸器内科1人、産科婦人科2人の大学院生と2人の中国人留学生、他大学・研究室直属6人が研究を行ってきております。これらの多くの優秀な大学院生との出会いをお作りくださいました臨床講座の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

このように心臓血管・神経系の薬理・生理・病態的な反応応答を「分子の言葉」でいかに説明できるかを追跡してきました。しかし、循環器系・神経系の恒常性を保ち制御するのにまだまだ未知の物質と未知の情報伝達系が関与すると考えられます。また、最近のゲノム解析の進歩により、ヒト遺伝子の全構造がまもなく決定され、21世紀はポストゲノムの時代に確実に入ろうとしています。今後は、これまでの生化学・薬理学及び分子生物学的技術をさらに展開させて、新しい生体の制御機構を担う物質の発見とその役割の解析、再生医学の方面で独創的かつ先端的研究を目指して、微力ではありますが分子生体機構学講座が一体となつて、新時代を担う若い活力のあるスピリッツを持った医師・研究者を育てつつ頑張りたいと思っております。

特に、若い大学院生の人達には、一生で一度しかない大学院生の時期に、今何が問題であるのかを論文及び臨床の場から読み取り、その解決には何をしたらよいのか、また、どのようにすれば実行できるのか、その結果はどこまで達成できているのかをしっかりと議論・実行できるようにしてほしいと願っております。複雑な生命の高次機能の解析とその破綻による病態の解析には、基礎と臨床の壁を今後ますますなくす積極的な気持ちが必要であり、これまでに以上の密接な協力体制が必要と考えております。また、千葉大学から世界にはばたく若い人材が輩出するために教養を上げて研究に教育に今後も努力して行きたいと思っております。

るのはな同窓会の先生方へこれまで以上のご指導、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。教授 木村定雄



スパルタスロン、日本人初の優勝

大滝雅之（平2）

この度私は、スパルタスロンというウルトラマラソン（フルマラソン以上のレース）で、優勝することができました。しかも『日本人初優勝』という栄誉にも与ることができ、とても嬉しく思います。

スパルタスロンは、アテネ・スパルタ間の240kmを不眠のまま足かけ2日で走り抜くレースで、世界で最も苛酷なレースと言われています。今年9月29・30日に、28ヶ国200名の選手が集まって開催されました。マラソンの由来と同様、伝令の兵士がアテネ・スパルタ間を走ったことに基づくそうです。



屋間は照りつける太陽の下で、涼しかった今年でも気温30度を越えます。夜間は、標高1200mのサンガス山を気温6度の中で登山するので、様々な気候や地形に対応しなければなりません。また給水や給食も大切な要素です。摂取しなければ脱水やエネルギー不足になり、逆に体調を考えずに摂取しすぎると、嘔吐・下痢などの消化器症状を起こします。この競技は単なるレースではなく、体のタフさが要求されるのです。

私は、千葉大学医学部陸上部へ教養1年の終わりに入部しました。最初は気軽な気持ちで入ったのですが、少数ながら精鋭の部であり、先輩方は東医体などの大会で各種目に参加し、優勝あるいは入賞したのです。自分分は陸上競技が未経験だったので、これではいけないと思い、練習に励み、専門

種目の5000mでは何とか通用するようになりました。学部3年の冬、全学の陸上部の方々に誘われて、初マラソン（河口湖マラソン）に参加しました（2時間54分）。千葉大学医学部呼吸器内科に入局後も、研修医時代を除いてジョギングやマラソンは続けていました。



転機が訪れたのは、大学院生として現在の分化制御学教室のお世話になってからです。研究という環境の変化も手伝ってか、自分の限界に挑戦したくなりまして、徳久剛史教授の暖かい後押しもあり、平成9年からサロマ湖100kmウルトラマラソンに参加することができました。そして、翌年から男子一般の部で、3位以内に入賞となったのです。すると欲望は更に高まり、世界最高のレースに出てみたいと思い始めました。そして前回（平11）念願のスパルタスロンに出場したのです。

その安定ぶりは、尊敬に値します。（驚くことに、世界のレースで千葉大医学部OBが、現在は上位に2人もいるのです。）しかし、このレースはそれ程甘くはありませんでした。前回はサンガス山手前の17km地点で棄権してしまいました。激しい嘔吐が急に襲ってきて、一気に身体が動かなくなったのです。競技歴初めての棄権でした。しかも翌日、ゴール地点でボロボロになりながら何とかゴールしてくる選手達を見ると、自分のふがいなさを感じました。そして、悔しさがこみ上げてきたのです。

それから今回のレースを年間の目標に体力作りを続けてきました。あくまでも、完走が目標でした。まさか完走と優勝が一度に得られるとは、思ってもみませんでした。前回の悔しさがあったからこそ優勝だと思えます。この点は、人生にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

スパルタスロンは、2日間の中に様々なドラマがあり、選手同士やサポーター、村の人々との人間的交流があります。それらが、終わってみると忘れられない思い出となつて、また来年走ろうと思ってしまうのです。同じ目標を持った者200人は1年に1回しか会いませんが、大切な仲間として妙に親しく感じてしまいます。

一度限りの参加と考えていたこのレースも、これからの私の生活の中心となっていきそうです。この10月から栗山喬之教授のご配慮で、都立府中病院勤務となりました。早速来年に向け、自宅の稲城市から病院へのランニングを開始しております。時々、多摩川べりで寄り道をしながら…。

るのほなの我が恩師(1)

永野俊雄(昭30)

筆者が学生の時の恩師教授を、失礼を顧みず、筆を執った。当時は国は敗戦から復興せず、貧困であったが、教授は学生に未来をかけて教育しようである。

個々の教室同門会の本や千葉大学医学部八十五年史に詳しい記載があるが、これは一九五〇—一九五五(昭和二十六—三十二年)に在学した一学生(新制大学一回生)の恩師についての感想である。(敬称略)。

当時の千葉大学医学部

一九五〇年代の千葉大学医学部の教授は殆どが東大の出身であった。筆者が入学した昭和二十六年にはわずかに、谷川久治、小林竜男、中山恒明、相磯和嘉(腐敗研究所)、石橋豊彦が千葉医大の出身であった。その後千葉医大出身の教授が増加した。敗戦、戦災から完全に復興せず、基礎の研究室、講義室、実習室は法医学教室を除いてバラックであった。大学病院(現在の医学部本館)が防空彩色のまま活動していた。例えば顕微鏡は疎開して焼けるのを免れた大正から昭和の始めのものであり、組織実習は照明の設備はなく、

日没で終わりであった。解剖実習はバラックのなかで、焼け残ったセメントの解剖台に木の足をつけて解剖実習を行った。冬はだるまストーブの暖房であった。講義はスライドはなく、掛け図であった。しかし、教授団は復興の意気に燃え、アメリカの文献をあさった。まだ自動車が見えない時代であった。

当時の教授を批判すれば、戦前に帝国大学を卒業し、文部省の外国留学試験に合格し、ドイツに行けば、帰国後自然に大学教授となった。多くの教授は千葉医大創立近くに東大卒の新進鋭の教授として着任され、戦後は復旧に苦労され、学生の育成に尽力された。またことに個性的な教授団でいわゆるサラリーマン教授はいなかった。まだ一流学術雑誌に実験論文を投稿することはまれであった。我々の学生時代は眼科の教授は欠員で、放射線も整形外科も麻酔科もなかった。また、プラスチック管もデスポの注射器もなく、ゴム管や硝子注射器で煮沸消毒をしていた。ベニシリン、ストレプトマイシンがやっと出始めた。

基礎医学教授
小池敬事(解剖学)

一高、東大卒、教授在職期間大正十三年—昭和二十九年。専門は感覚器(内耳)の発生学。ドイツで研究した結果はカイベル・モールの発生学の成書に掲載されている。学生には感覚器を講義された。その後人類学に変わられ、日本人の指紋の研究をされた。すでに学長であり研究室には来られなかった。また新潟大学学長を務めた。講義は明快な発音で講述された。門下に安永正哉、三橋公平がいた。



森田秀一(解剖学)

埼玉県出身、一高、東大卒。井上通夫に師事。ドイツ、ベルギーに留学。細胞学とくに精子形成を専攻。ザイメン博士の通称もあった。教授在任は昭和三年から昭和三十四年。学生にはミクロを講義し、独特の髪型、特別な眼鏡、ゴム靴を着用し、小声で講義し黒板の図は始めは小さく、段々に拡大しノートをとるのに苦労した。試験は厳格で、百何題の問題の内から一題を出題、実習試験はプレパラートを一枚引いて、その中の点について質問された。ピーコンとなった者が少なくなかった。学生からは、森田、滝沢(病理学)の試験が受ければ、必ず卒業出来ると云われていた。大学のすぐ後ろの通称森田山に住まれ、昼は自宅に帰られた。趣味は映画、将棋で、将棋で試験が通った学生がいるとの噂があった。小生は大学院で指導教官としての鈴木教授を失ったので、途方に暮れたが、森田解剖に移籍した。鈴木、森田両教授はそれぞれ西、井上門下で東大で確執があり、それを千葉まで持ち込んでいた。しかし、鈴木教授が急逝したので、小生は森田教室に入門できた。ここでは電子顕微鏡による研究が始まったばかりで、小生もこれを専攻した。これが小生の研究の分岐点となった。当時は教室を移動する事は全く考えられない。入局すると、森田教授は寡黙ではあったが、寛容な性格で、学生時代の印象とはまったく違った。試験の

厳格さは答案が不十分であったのが原因で、公平であるとは分かった。

私事ですが、その後たくさんのお恩師から薫陶を受けたことが、小生の財産となった。

鈴木重武(解剖学)



青森県出身、二高、東北大卒業後、東大で西成甫に師事、ドイツ、スイスに留学。当時最先端であった実験発生学を研究。教授在任期間昭和三年—昭和三十年。入学してすぐの解剖学の講義で、解剖の講義内容の項目を手製ガリ版にした印刷をもらった。講義の内容は、名詞はドイツ語ラテン語で、てにをはだけ日本語で、人体を脊椎動物の一員としてとらえ、発生学的比較解剖学的に、きわめて理論的にオスモスを解説され、普通の解剖学の教科書に書いてない難解ながらきわめて魅力的な講義であった。これが大学の講義かと驚いた。性格はきわめて実直で冗談など聞いたことはなく、縁なし眼鏡で、ソフト帽子を着用していた。後で知ったが、講座の運営や家庭的に

は、きわめて苦労の多い環境であったが、微塵たりともそれを表したことはなかった。学生や解剖学会では畏敬と尊敬を受けていた。当時の千葉大学医学部には、4名の同姓教授がおり、しげたけ先生と呼ばれていた。

教室には野中俊郎と鈴木隆之がいたので、またスズキマヨールと呼ばれた。小生は彼の学問的人格の魅力から大学院に入ったが、そのとき白血病で急逝され、始めから指導教官を失った。極言すれば、良き時代(経済的には貧困であった大学の時代)の典型的な医学部教授であった。うがった噂によれば、ドイツに留学中に結婚となり、再起不能で急遽森田教授がうまれたが、その後無事帰国したので千葉の解剖は全国で最も早く三講座の解剖学教室となったと聞いているが、その真偽を確かめることは出来ない。

鈴木正夫(生理学)



東大出身、橋田邦彦に師事。ライプツィヒ大学に留学。教授在職期間昭和十一年—昭和四十年。巨漢で風貌と動作が何となくゴリラ

に似てゴリラちゃん通っていた。講義は神経生理学(電気)で非常に難解であったが、その歴史的背景から詳しく解説されたが、そのしゃべり方が独特で(訥弁)、自身の生理学教科書があったので、学生はあまり出席しなかった。ドイツ語、英語の読解力のスピードは驚かされた。神経の刺激と興奮の関係と、その閾値の変化を第三作用と名付け、通電麻酔の基礎を提唱した。我慢して拝聴すればすばらしい講義であった。趣味はダンスとお酒で、よく葛城の自宅にお送りすると、ダンスを始められた。銀座のダンスホールで優勝したことをうかがった。それ以外の趣味が広く、また、エスプレッソの研究と実用の第一人者であり、また東洋医学の歴史に造詣が深かった。歌人としても有名で数百首の歌集を出版された。レブラ神経の生理学的調査のため、学生とともに、レブラ療養所につれていくてくれた。筆者はレブラの患者さんをはじめてみた。門下に本間三郎、渡部士郎、加濃正明(同級生)がいた。当時助教教授であった福田篤郎は独立して労働生理学を研究し、東北地方の高血圧の調査を行った。(次号へ続く)

第74回日本整形外科学会

学術集会を開催するにあたって

整形外科学講座 教授 守屋秀繁(昭42)

第74回日本整形外科学会学術集会を平成13年4月19日(木)、20日(金)、21日(土)、22日(日)に幕張メッセ国際会議場および展示場、幕張プリンスホテル、ホテルニューオータニ幕張を使って開催させて頂く予定です。初代鈴木次郎教授、2代目井上駿一教授が成し得なかった大仕事を主催することを思うと、まさに身の引き締まる思いです。

各種疾患が克服されつつある中、骨と関節の疾患の克服こそが21世紀の人類に幸せをもたらすと考え、今学会のスローガンを「整形外科 新たな挑戦 21」としました。スローガンに則り、21世紀の船出に相応しいような学会にすべく約500名の同門諸兄にお手伝い頂き準備を進めております。シンポジウムとパネルディスカッション

21世紀に整形外科学を進展発展させる可能性のあるようなシンポジウムを12題、パネルディスカッションを15題用意しました。シンポジウムでは各々の分野で最先端の知見を御発表頂き、さらに会員に方向性を教示

動にさらに関心を抱いて頂ければと願っております。

教育講演

整形外科医のさらに充実した卒後研修が叫ばれている現状を鑑み、できるだけ広い分野の教育講演を用意しました。日整会推薦3演題を含め、日本人演者21名、外国人演者15名に講演をお願いしてあります。19日(木)と20日(金)には主に最先端の研究や実際に手術などを積極的にしている会員を対象にした講演を予定し、21日(土)と22日(日)には主に日常診療に直ぐに役立つような講演を企画しました。

そのようなわけで、シンポジウム、パネルディスカッション共に演者のうち、非常に多くの方が若い方であるということは今回の特徴の一つかもしれません。遺伝子医学、Computer Surgery、再生医学などが大きな目玉になると思います。

一般演題

国内および国外から約千題の一般演題の応募を頂き、そのうち約850題を口演採用とさせて頂き、その他にポスターセッション、ビデオセッションなどを用意しました。

記念講演

私が本年3月迄、千葉県医師会の副会長を務めさせて頂き、医師会の重要性を改めて認識した事もあり、今回の記念講演はこの度、世界医師会会長に御就任なされた坪井栄孝日本医師会会長に「21世紀の日本の医療・世界の医療」と題して御講演を頂く予定であります。御講演を通して日本整形外科学会も日本医師会活

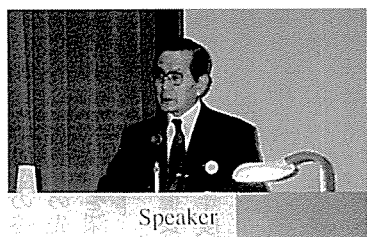
なトピックスになっている軟骨の修復について、その基礎から臨床まで討論して頂く予定で学術集会前日の4月18日(水)午後1時にJais Deacon教授(スウェーデン)をはじめ、内外の御高名な先生方に御参加頂き開催する予定です。軟骨修

第1回アジア寄生病学者連盟

(FAP: Federation of Asian Parasitologists)の開催について

寄生虫学講座 教授 矢野明彦(昭47)

た日韓寄生病学セミナーを通じて、アジア唯一のOECD加盟国である日本と韓国の寄生病学者によるリーダーシップでアジア寄生病学者連盟設立の構想を暖めてきました。1998年に国際寄生病学会に引続き開催した第4回日韓寄生病セミナー(Eoium Cheju-4)を千葉で開催しましたが、日韓の寄生病学者のみならず、ベビハニ、WHO代表、世界寄生病学者連盟会長、第9回および第10回国際寄生病学会会長、およびホスト側として磯野可一千葉大学長にご臨席賜わり、100名の参加者を迎え開催されました。



ウェルカムアドレスを述べている磯野学長

復の基礎と臨床に興味のある会員の方々の御参加をお待ちしています。

その他

千葉は大きく変わりつつあります。これを機会に全国のものな同窓会の方々の御参集をお待ちしております。

1998年から毎年開催してき

討議を進め、多田功九州大学名誉教授を代表とする日本側組織委員会が強力なプロモーターとして働き、アジア寄生病学者連盟設立が実現する運びとなりました。

寄生病は「貧者の病」と言われるように、その感染の成立には経済的、社会的、政治的な問題が医学的問題の背景に存在します。世界人口の4割を超す人々が住むアジアには地理的、社会的に共通点が多いことにより、アジアに流行する寄生病はほぼ同じであります。世界的にも重要な寄生病症流行地域であるアジアの発展を考えると、上で、地理的要因を考慮した寄生病対策は不可欠であり、アジアの寄生病学者が協力関係を築いていくことが期待されておりました。

民族、歴史、文化、宗教政治体制、社会構造、経済力などが極めて多様な国々から成るアジアでありながらその本質においてアジア共通の特徴を把握し、サイエンスと国際保健の立場からアジアの寄生病学を再整理することによって21世紀の学際的な方向を具体的に決めることを目的とした国際会議の開催とアジア寄生病学者連盟(FAP: Federation of Asian Parasitologists)を設立する必要性が言われていました。

アジア寄生病学者連盟(FAP)はアジアの寄生病学者間の協力によってアジアに流行する寄生病の撲滅と寄生病学の進展を目指す、最新科学の知識と技術の導入により新たな寄生病対策法を開発すると共に、既存の対策法をより効果的に機能させるための学際的研究を推進することを活動目標にしております。さらに、FAPは世界保健機関、世界寄生病学者連盟、およびヨーロッパ寄生病学会、北アメリカ寄生病学会、ラテンアメリカ寄生病学会とも連絡をとり、アジア寄生病学の活動成果を世界へ発信し全世界的観点での貢献も希求していくことも活動目標とします。

今回の大会で、FAP事務局を千葉大学寄生病学教室に置くことが正式に決定されました。千葉からアジア各国へ、そして世界の国々へFAP設立のインパクトを発信できたことは私達、FAP設立組織委員会の誇りであります。

1998年の「第4回日韓寄生病セミナー」から「第1回アジア寄生病学者連盟大会」に至るまで、一貫して私たちの活動に対し、高配、

ご援助をいただき、また勇気を与えていただきました磯野可一学長、また国際的視野で指導いただきました世界寄生虫学者連盟(WASP)会長であり日本寄生虫学会理事長でもある鈴木守先生(昭36)、第9回国際寄生虫学会会長であり当教室の同門会長である辻守康先生(杏林大学教授)を始めとするのはな同窓会の先輩・先生方のご支援、

第10回日本小児リウマチ研究会を主催して

小児科学講座 教授 河野陽一(昭48)



日本小児リウマチ研究会は平成3年に東京で第1回が開催され、以来毎年全国各地の小児膠原病専門医が一堂に会して、小児の膠原病の様々な問題について討論し合う場として発展してまいりました。本年は第10回という節目となる研究会を私どもの教室で主催することとなり、10月14日千葉市文

ご指導なくしてはJAMP設立大会の開催は不可能でした。JAMP組織委員会を代表しまして心よりの感謝を申し上げる次第であります。同時に今後JAMP活動としてやらなければならない課題が山積みされております。今後とも、のほな同窓会の会員の先生方のお一層のご支援、ご指導を承りたくお願い申し上げます。

化センターに於いて全国から多数の先生方の参加をいただいて、盛会のうちに会を終えることができました。今回は一般演題47題の応募があり、主催者としては大変嬉しいことでしたが、一日の研究会としては数が多く、各演題の発表時間が若干短めになったことが少々残念でした。演題は稀な症例の報告から基礎医学研究まで幅広く、疾患も皮膚筋炎、強皮症、血管炎候群、シェーグレン症候群、混合性結合組織病、若年性関節リウマチ、全身性エリテマトーデス(CTD)と小児の膠原病をほぼ網羅しております。小児膠原病は症例数こそ成人に比し少ない

ものの、どの疾患も重症例が多く治療が難しい症例も少なくありません。また治療としてステロイド薬が用いられますが、小児では治療期間が成長期に重なるので、低身長や肥満による外見上の悩み、それによる集団生活でのいじめ、また骨粗鬆症などの合併症と、ステロイド治療には多くの問題が山積みされております。如何にして副作用を少なくして治療効果をあげるかという意図のもとに幾つかの新しい治療法が提案され、若年性関節リウマチに対する末梢血幹細胞移植、最近話題の抗TNF- α 療法、ステロイド薬の経口パルス療法、リポ化ステロイドの静注療法、CTDに対する免疫抑制剤の効果などについて活発な討議が行われました。

また、個々の症例に即した治療法の選択のために、疾患活動性の指標や予後を予測するマーカーの解析など、日常診療の場で患者から得られる情報を十分に活用した臨床研究の成果が報告されました。

今回は新しい試みとして、東邦大学医学部付属倉病院皮膚科の田辺恵美子先生(昭49)よりCTDにおける稀な皮疹について、千葉市

立海浜病院整形外科の坂本雅昭先生(昭60)による大腿骨頭壊死とステロイド治療について、およびアメリカで実際に抗TNF- α 療法に関わってこられた鹿児島大学小児科の先生による抗TNF- α 療法の効果と限界について講演をいただきました。いずれも日常診療に有益な情報が得られたと大変好評でした。

議論に熱が入り、休憩時間にはなくなり終了時間も延長しましたが、会の終了後の懇親会にも多くの先生方が参加され、親睦を深めることができました。

最近成育医療の重要性が指摘され、平成13年度には国立成育医療センターの発足も計画されております。今後、小児慢性疾患の医療における重要性はさらに増加すると考えられ、小児膠原病はその中心となる疾患の一つであるといえます。

内科、整形外科、皮膚科など、他科との連携のもとに包括的な医療がまさに必要とされる分野であり、これからの発展と医療の充実が望まれます。今回の研究会で討論されたことをそれぞれの施設に持ち帰っていたいただき、膠原病の子ども達のQOL向上に少しでも役に立つことを願っております。

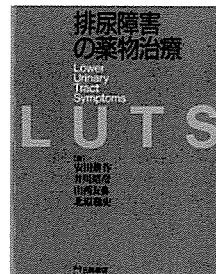
同窓会員著書の紹介

安田耕作(昭42) 分担著

「排尿障害の薬物治療」を読んで

三輪書店 定価2800円

伊藤晴夫(昭39)



安田耕作先生は千葉大学医学部泌尿器科に入局後、一貫して神経泌尿器科領域の研究に従事してきました。現在、獨協大学越谷病院の泌尿器科教授として活躍中ですが、排尿機能に関しては日本の第一人者であります。これまでも神経学的ならびに薬理学的な基礎的研究から臨床的研究まで多数の原著や著書を著してきました。先生の今回の著書は、こうした幅広い知識をもとに、実際の臨床の場でどのような診療を進めて行くのかを、非常にわかりやすく述べているのが特徴だと思います。

現在でも高齢化社会ですが、今後は更なる高齢者の増加が予想され、前立腺肥大症、前立腺癌、尿失禁といった泌尿器科疾患以外にも、脳血管障害や糖尿病、骨盤内手術に伴う排尿障害

護者からも、相談を持ちかけられる機会も多くなってきました。そうした場面での、適切なアドバイス、治療法の提示の一助になり得る著書と考えます。

世の中のニーズに応えるべく、排尿障害の治療薬は現在数多く開発中のようにです。特異的なレセプターの探求と、より選択性の高い薬剤の開発により、効果的で、かつ、副作用の少ない薬剤が待ち望まれます。そうした治療薬の最新の情報とともに、将来の可能性についても述べられています。多くの患者、ならびに、われわれ医師にとっても、期待を膨らませてもらえる、そんな一冊に仕上がっていると思います。

「排尿障害の薬物治療」を書いてみて思うこと

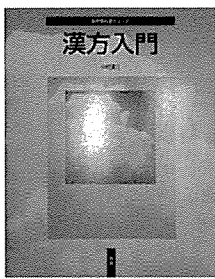
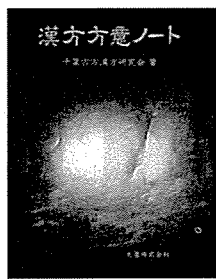
安田耕作(昭42)

入局当時泌尿器科で扱う排尿障害は淋菌性尿道炎後遺症の尿道狭窄が主であった。混乱の時代の名残のような疾患で原因も明確で治療方法も簡単に選択できた。それは機能障害を殆ど含まない器質的な尿道閉塞が主な病態であるからである。その頃でも機能的排尿障害は注目されていた。夜尿症に対する三環系抗うつ

し、車社会が引き起こす脊椎損傷患者が急増し機能的排尿障害である神経因性膀胱患者が多数出たから本格的排尿生理学が臨床に登場した。生理学好きの私にとって生理学の水戸時代に投影された光のように思えた。真っ先に排尿障害に治療薬として脚光をあびたのは、前立腺肥大症治療薬（抗アンドロゲン薬、生薬、αブロッカー）であった。次に老人に多い切迫性尿失禁に対する抗コリン薬の開発が進み

漢方の初級講座のために

中村謙介（昭42）



「漢方は分りにくい、非科学的だ」と云われる。そのような非難を拭うのは、漢方に踏みこんだ者の責任であろうと思う。実際に漢方薬を使ってみると予期以上の効果に驚く

（ボラキス、バップフォー）、腹圧性尿失禁に対するβアゴニスト（スピロペント）やごく最近神経因性膀胱に対するαブロッカー（エブランチル）が登場した。どう言う訳か（研究者の努力と言うより企業の先見性の優秀さと思う）本邦は世界で最も数多くの排尿障害に対する薬物を持っている国となったのである。日本の国民が「〇」を大切にしようとしている現れなのかも知れない。

その漢方薬の適応する症状の組合せで説明する。類似した漢方薬の鑑別は、一方にはある症状があり、他方にはそれが無いというように、やはり症状の有無でなされる。

形を成したという安堵がある。著者が25年かかって納得した漢方の概論は、省みて寂寥を感じなほどのものだが、それを1、2週間の読書で伝えたいと考えながら工夫を凝らしてみた。

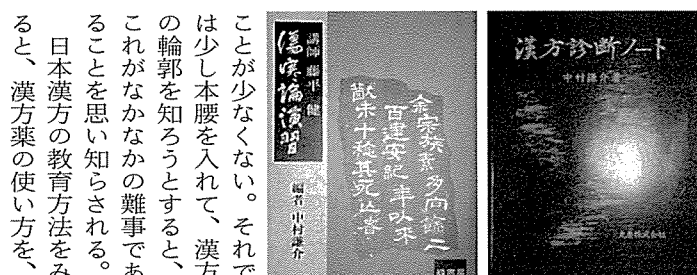
『傷寒論演習』（緑書房・736頁・九、五八三円・1997年）本書は藤平健先生（昭15）の市井における5年余のご講義を纏めたものである。藤平先生の師匠・奥田謙蔵先生の『傷寒論講義』をテキストとして、その難解な部分の解説がなされ、さらに活発な質疑応答によって、日本漢方が聖典視する『傷寒論』を読み砕いている。出版慰労会の後、間もなく

藤平健先生は亡くなられた。本書の一冊を手向けて永訣とした。

小倉重成先生（昭17）は「東洋医学的な考え方は局所的な変化には殆ど意を用いる事なく、全身的な生体反応の歪みの種類や程度を問題にする。そのため漢方は臨床の各科に共通な、云わば臨床総論とも名づけられるべきものであろう」と云われた。細分化に反省の急な医療界において、漢方はその存在意義を増しつつある。

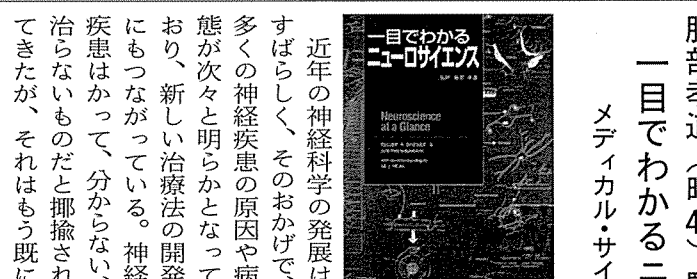
その進歩に追いつくのが困難となり、ついつい理解することをあきらめ勝ちになる。しかし、専門医としてそういった態度は許されるものでなく、神経科学の全体を網羅したわかりやすい本があればと願っていたところ、本書に出会った。

本書は3人の英国人によって、主に医学部の学生向きに、基礎医学的神経科学の復習用教科書として書かれたものである。内容は大きく1、神経系の解剖学的・機能的成り立ち、2、感覚神経系、3、運動系、4、自律神経系、5、神経可塑性と神経系疾患、の5章に分かれており、それぞれの章がさらに細分化されている。ユニークと思われるのは、ひとつひとつの項目が見開き2頁に収まっており、しかも左の頁には工夫された図があることである。実に読みやすく、理解しやすい構成になっている。基礎医学の本とはいえ、臨床事項についての記述も多く、臨床医にとって手軽な神経科学の入門書でないかと思われ、この方面に関心のある同門諸兄に勧めたい。



「漢方は分りにくい、非科学的だ」と云われる。そのような非難を拭うのは、漢方に踏みこんだ者の責任であろうと思う。実際に漢方薬を使ってみると予期以上の効果に驚く

『漢方入門』（丸善・137頁・二、四〇〇円・2000年）は、しばらく前から自分に課していたもので、やっと



遠い過去のものとなってきた。このように臨床医学に大きなインパクトを与えている神経科学の発展のスピードは、今後ますます加速されていくことが予想されている。臨床医にとって、この神経科学の進歩についていきたいと思うのは当然であるが、神経科学が解剖学や生理学、薬理学などの従来の学問の枠組みを越えて発展しており、どの本を読めばよいのか分りにくく、一度知識の習得に遅れると

服部孝道（昭42） 監訳

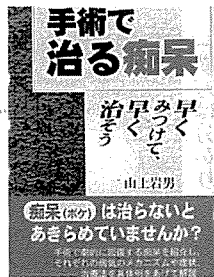
一目でわかるニューロサイエンス

メディカルサイエンス・インターナショナル

山上岩男 (昭53) 著
「手術で治る癲癇」

早くみつめて、早く治そう！

近代文芸社 定価1,500円



経外科医は、その情報一般の方々に普及するという努力が足りませんでした。本書では、まずこのよう

な「手術で治る癲癇」があることを、さらにはどのよう

な病気が原因で「手術で治る癲癇」が発生するのか、

どのような手術で癲癇が治るのかなどを、具体的な症

例も示しながら、一般の方々にもご理解いただけるように、わかりやすく解説

しました。まず「手術で治る癲癇」の原因となる代表的な3つの病気を、「正常圧水頭症・慢性硬膜下血腫・

「硬膜動脈静脈奇形」について説明しました。それぞれ

の病気のメカニズム、症状や治療法などを解説した後、

病気にまつてさらに理解を深めていただくために、症

例の経過を具体的に示しました。最後に「手術で治る癲癇」の全体像についてま

とめ、付録として代表的な癲癇のスクリーニングテストである「長谷川式癲癇診

査スケール」、本書の内容を理解していただく上で必要な用語集を用意しました。

適切な治療を受けられなかった「手術で治る癲癇」の患者さんはいっぱいいます。

「手術で治る癲癇」を、実際に治療する立場にある脳神

経外科医は、その情報一般の方々に普及するという努力が足りませんでした。本書では、まずこのよう

本書を通して「手術で治る癲癇」の存在を一人でも多くの方に知っていただき、すべての「手術で治る癲癇」

の患者さんが、適切な治療を受けられるようになることを願っています。

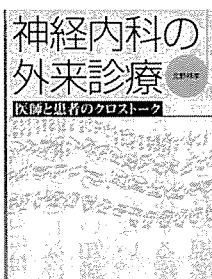
その原点に立ち戻ろうと、実に説得力ある文章で読者に語りかけてくれる。しかし、問診が重要であることは少し分かっていても、なぜ重要なのか、どうすれば良い問診がとれるのか、外来診療ではどうあるべきか、などという点については、序文に平山恵造名誉教授が書かれておられ、本書の価値をさらに高めている。

清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)北野邦孝 (昭46) 著
「神経内科の外来診療」

―医師と患者のクロストーク―

医学書院

服部孝道 (昭42)



本書昭和46年卒で、松戸市立病院の神経内科の部長をされた後、松戸市内で神経内科のクリニックを開業されておられる北野邦孝先生が、ご自分の経験をもとに実にユニークな本を書かれた。この本は患者と医師との対話(著者はそれをク

ロストークと表現している)を中心に書かれており、問診からいかに診断や治療方針をたてるかということが、

良く理解できるように工夫されて書かれている。

本書は1、神経内科への小児、2、神経内科を全体から見た、3、神経疾患を考

える、の大きく3章に分かれており、第1章の

患者さんが、適切な治療を受けられるようになることを願っています。

その原点に立ち戻ろうと、実に説得力ある文章で読者に語りかけてくれる。しかし、問診が重要であることは少し分かっていても、なぜ重要なのか、どうすれば良い問診がとれるのか、外来診療ではどうあるべきか、などという点については、序文に平山恵造名誉教授が書かれておられ、本書の価値をさらに高めている。

本書はほとんどが患者との会話形式で記載されており、医師が聞きたいことは「ちょっと一言」というコラム形式でまとめられている。神経疾患をすべて網羅した本ではないが、日常の臨床で遭遇する疾患はほとんどがカバーされており、会話形式であるため読みやすく、しかも理解しやすい。

読者には今、目の前に北野医師と患者がおり、診察の様子を見学しながら、説明を受けている気がする。まさにベッドサイドラーニングの現場にいるような感じである。

本書は神経疾患に関心を有する医師、とりわけ「神経疾患は難しくとつきにくい」という誤解をお持ちの方に読んでほしい。その誤解がとけるのではないかと期待される本である。

その原点に立ち戻ろうと、実に説得力ある文章で読者に語りかけてくれる。しかし、問診が重要であることは少し分かっていても、なぜ重要なのか、どうすれば良い問診がとれるのか、外来診療ではどうあるべきか、などという点については、序文に平山恵造名誉教授が書かれておられ、本書の価値をさらに高めている。

本書はほとんどが患者との会話形式で記載されており、医師が聞きたいことは「ちょっと一言」というコラム形式でまとめられている。神経疾患をすべて網羅した本ではないが、日常の臨床で遭遇する疾患はほとんどがカバーされており、会話形式であるため読みやすく、しかも理解しやすい。

読者には今、目の前に北野医師と患者がおり、診察の様子を見学しながら、説明を受けている気がする。まさにベッドサイドラーニングの現場にいるような感じである。

本書は神経疾患に関心を有する医師、とりわけ「神経疾患は難しくとつきにくい」という誤解をお持ちの方に読んでほしい。その誤解がとけるのではないかと期待される本である。

本書は、私の先代の微生物学第一講座を担当しておられた清水文七名誉教授が「ウイルスがわかる」に次いで書き込まれた御本であり、ウイルスのみならずヒトゲノム計画、クロール羊、不老不死、ヴェーロ毒素等々広範な生命科学の話題について解説されている。物語の主役はVeroと

いう一風変わった名前を持つ細胞である。加えて、一生命科学者としての後進に対するメッセージが込められており、教育者として研

究者としての清水先生の集大成とでも言うべき書である。一般の読者にも分かりやすいように書かれているが、研究者としてのメッセージをひしひしと感じるという点から、医学部学生や若い医学研究者には是非読んで頂きたい一冊である。

その内容の一部は千葉大学医学部御在中にお書きになられた「ウイルスがわかる」でも少し触れられているが、紙面の関係から前著ではお書きになれなかったことが存分に述べられている。「ウイルスがわかる」をお読みになった読者は是非ご期待願いたい。

通常、専門家が自分の専門を掘り下げて、最先端の知見までを書けば、一般の読者向けではなくってしまふのが通例であるが、この本は違う。医学に無縁の読者にも「わかりやすく」かつ「おもしろく」詳細に書かれている。その秘密の一つは詳細な調査と綿密に練られた構成である。もう一つは、御退官後もお続け

清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)清水文七 (昭33) 著
「ウイルスの正体を捕らえる」朝日新聞、朝日選書661
白澤 浩 (昭32)

なっているパラメディカルへの講義により、医学部で教鞭をとっていた経験に更なる磨きがかかったためではないかと推察している。清水先生は一般人にも理解できるような例え話を引用して、説明が難しい概念を学生に教えるのを得意としておられた。随所にそのような例え話が散りばめられており、前著の「ウィルスがわかる」の「わかる」の部分に磨きがかかっている。私も沢山のネタを仕入れることができた。医療関係者にとっては、患者さんへの説明に参考になるネタが詰まっている。

そして、この本は清水先生にしか書けない本である。医学に関する一般人向けの解説本であれば他に類書はあるかもしれないが、今や「Els」細胞に次いで医学研究に欠かせないVero細胞を切り口にした本であれば、Vero細胞を著名な細胞にさせた清水先生をおいては他にはいない。まさに、Vero細胞の物語を書けるのは清水先生以外にはいっしやらないという責務からお書きになったのであるまいか。

Vero細胞をご存知ない方もO157のヴェーロ（ベロ）毒素は御存知ではないかと

思う。ヴェーロ毒素の名前はVeroに由来する。何故ベロと敢えて書かないのかは、本書に述べられている。本書の主役Vero細胞が産声を上げたクリーンベンチは現在でも微生物学第一講座にあり、今尚毎年学生実習でVero細胞と共に活躍している。本書にも紹介されているようにそのクリーンベンチには「Gutta cavat lapidem」（雨垂れ「真実」岩をも穿つ）とマジックインクで書かれた文字が残っていて、私たちを鼓舞してくれているが、実は誰が書いたのか不明のまま今日に至っている。Vero細胞の生みの親、安村美博先生（昭26）（第三回るのはな同窓会賞受賞、119号参照）でも、清水先生でも、前感染研所長山崎修道先生（昭36）でもないということ、微生物学教室七不思議の一つである。

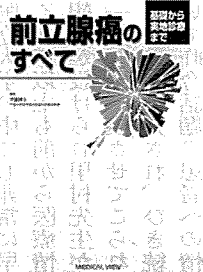
私はたまたま、本書に登場する寺島東洋三先生（昭24）が保存されていた109代Vero細胞解凍の場面にそれとは知らず立ち会った一人で、図らずも、教室の液体窒素タンクに眠る最も古い111代のVero細胞のお守りをする立場となったが、この細胞の歩んだ運命には今でも感銘を受ける。読者

も、偶然にして、尚かつ、安村先生の不屈の精神によりこの世に生まれたVero細胞が経験した数奇な運命と出会い、感動を共にすることになるだろう。

伊藤晴夫（昭39）編 「前立腺癌のすべて」

MEDICAL VIEW社 定価10,000円

中田瑛浩（昭38）



前立腺癌は欧米諸国の男性において発生率・死亡率ともに第1、2位の悪性腫瘍であり、その社会的注目度はわれわれが考えるよりもはるかに高い。最近ではジュリアーニ・ニューヨーク市長が前立腺癌治療のため上院議員選挙への出馬を断念し、かのヒラリー・クリントン女史が当選したのには記憶に新しいところである。近年、我が国においても前立腺癌は急増してきており、住民検診への前立腺腫瘍マーカー（前立腺特異抗原）の採用の動きなど広く関心をもたれてきている。本書はそういった状況の中まことにタイムリーな出版である。既にいくつかの前立腺癌についての専門書は存在していたが、本書は基礎医学から最新の治療学まで網羅し、かつ図表を多様して非常にわかりやすい内容になっている。若手泌尿器科医や内科医を対象としているようであるが、患者などの医療従事者以外の層の購入も多いようである。出版後わずか1年半に第4版まで増版した所以であろう。

本書では、まず疫学・解剖学・病理学・分子生物学といった基礎医学的側面の解説に続いて、腫瘍マーカー・画像検査・病理検査法といった診断学、各治療法についての特徴・最新の治療法さらにはQOLからインフォームドコンセントに至るまで非常に要領よく記述されている。鑑別疾患としての前立腺肥大症についての項目もあり、泌尿器科医以外の方にも分かりやすい内容になっている。最後に約20例ほどの実際の症例提示もあり、基礎から実践まで対応

できる良書である。

前立腺癌研究において我が国のみならず、世界的にもトップレベルの評価をうけている千葉大学医学部泌尿器科学教室の総力をあげて、伊藤晴夫教授の編集の元に、著者が千葉大学および帝京大学市原病院の泌尿器科の教室員のみ（全員のはな同窓会員）で執筆されており、従来の分担執筆にありがちな内容の重複や用語の不統一といった点はみられず、多分野をカバーしながら非常にまとまった本となっている。これは伊藤晴夫教授以下教室員の方々が真摯な姿勢で前立腺癌という病気に対して取り組んでこられたまさに集大成ともいえる。泌尿器科医にとってはもちろんのこと、医療従事者の座右の書となる。50歳を過ぎた男性の同窓会員の方には是非一読をお勧めしたい。

お知らせ

同窓会員の皆様が発行した書籍について紹介させていただいておりますので、本の表紙の写真や書評をお頼みしたい先生のお名前などを添えてお送り下さい。

各地のはな会 だより

埼玉支部総会

平成12年度のはな同窓会埼玉支部総会は、去る8月27日の日曜日、関東地方ではもっとも暑いと定評のある熊谷市で開かれた。

総会は40年卒の三好弘文君（厚生連熊谷総合病院院長）の司会で、物故の四先生（小坂耕二先生・素木正夫先生・関保先生・齊藤友宏先生）に黙祷を捧げ、次いで副支部長の田口勝先生（昭34）から会務・会計報告、幹事の阪信先生（昭35）の監査報告のあと、喜寿の



三先生（川上成之先生・高野俊男先生・中村豊先生）と、日本医師会最高優功賞を受けられた伊藤敏夫先生（昭30）にそれぞれお祝いを差し上げ、伊藤先生からお礼のご挨拶があった。続いて阪先生から本部報告があり、伊藤進君（昭43）から部誌の発刊の提案があり、満場一致で承認された。

続いての学術講演会は栃木亮太郎君（厚生連熊谷総合病院副院長・昭40）が座長となり、先ず埼玉医大・総合医療センター眼科教授河井克仁先生（昭39）が「視生活とバイオマテリアル」と題して、コンタクトレンズや白内障の眼内レンズ等の最近の話題について眼科以外の会員にも分かりやすく述べられ、大変興味深かった。2席目は定番の「学内事情」で、現産婦人科学教授関谷宗英君が大学の現状について彼独特の話し方で話してくれた。終って有馬道男先生（昭29）からお二人に感謝の言葉と謝礼を差し上げた。

記念撮影は経

費削減のため冠木(昭40)による素人写真であったが、ご覧のとおりまずまずの出来栄えであったのは何かの間違いである。

熊谷地区で3人いる同級生がそれぞれ分担して進行を受け持ったが、最後の懇親会は冠木の担当である。

この不景気の中、限られた予算で諸兄に充分満足していただくのはなかなか難しいが、ホテルに無理を言っ

てビールはエビス、バンケットは1テーブル1人と洒落こんだ。関谷教授は千葉に用事があるとかで中座したが、和気あいあいの宴会は時間の経つのがとても早い。

酔いが廻らないうちに来年の開催地の大宮市を確認し、幹事の松山迪也先生(昭35)から歓迎のご挨拶があり、最後に万歳三唱：とも考え

たが、時あたかも北朝鮮との外交会談中であることから国の足を引っ張ってはとこれは省略、おまけに二次

会も省略して流れ解散となった。なお大変残念であったことは、支部長の井上幸万

先生(昭27)が直前になってギククリ腰になられご欠席であったことだ。しかし、

もう回復されて平常の生活に戻っておられるのでご安心下さい。以上、ご報告ま

で。(冠木徹彦・昭40)

るの は な 同 窓 会 静岡県支部総会開催

さる8月5日、2年ごと

に開かれる当支部総会が、今年は静岡・清水を中心とした中部地区の担当で静岡市のセンチュリーホテル静岡にて開かれ、60名の出席があり盛会であった。

まず恒例の記念講演が開かれ、今回は昨年植村研一名誉教授(昭34)の後任として浜松医科大学脳神経外科の2代目の教授に就任された難波宏樹教授(昭54)

と大学から附属病院医療情報部の里村洋一教授にご講演いただいた。

難波教授は千葉県がんセンターに在任中から脳腫瘍の遺伝子治療に関する研究を続けられているが、今回は専門外の会員にも分かりやすく「癌と遺伝子」と題して発癌のメカニズムに関する遺伝子の役割や今後期待されている遺伝子治療の基礎などについて解説された。

また将来の医療のありかたについても言及され、各個人の遺伝子の情報に依じたオーダーメイド医療が求められて行くだろうと述べられた。先生には遺伝子治療のバイオニアとしての活躍を期待したいものである。

里村教授にはお忙しいス



活動に熱心ではない人が増えているが、集まった時にそれぞれの会員に得るものがあるような会合にして行けばもっと盛り上がるだろうと述べられ、この日の講演会もその意味で大変有意義なものであったことを指摘された。

次に宮本恒彦

ケジュールの中を静岡までおいでいただき、「情報開示時代の医療と情報管理」というトピックスに関して講演された。

まず千葉大学では全国の国立大学の中でも非常に早く20年以上前から医療情報部が設けられ里村先生が一貫して発展させてこられたことを紹介され、引き続きいて昨今話題の患者への情報開示や電子カルテのこと

など、医療情報の管理に関わる多くの問題について具体的に解説され、大変有意義な講演であった。

講演に引き続き総会が吉川正宏理事(昭37)の司会で開かれ、まず野末道彦支部会長(昭33)が挨拶され

た。その中で、最近同窓会

ものである。特に議論になるようなテーマはなく記念撮影の後に懇親会に移った。

まず担当地区を代表して松浦徳久(昭27)副会長の挨拶に引き続き、里村教授に大学の様子などをお話いただいた。次いで先ごろ県医師会の会長という大役を勇退されたばかりの勝呂安(昭20専)顧問の御発声で乾杯し、宴席に移った。静岡県

は新幹線の駅が6か所もあるように東西に長く、とかく全体での交流の場が少なくなる傾向があるが、このような席では意外に所属教室の横のつながりなどもあって地域を越えて話がはずんでいたようである。最後に今回の総会開催に際して実務的な面を支えられ、当日も会計などで忙しく動かれていた望月徹常任理事(昭28)が現金入りのバッグを片手に閉会の挨拶をされてお開きになった。次回の総会は2年後に東部地区の担当で行われる予定である。

本県では新規の開業は少なく、結果として開業の会員は全体に高齢化しつつある。その一方で目まぐるしく異動がある若手勤務医たちがおり、今後の支部活動をどのようにして行くかを真剣に考えるべき時期にきているようである。会の運営自体も勤務医たちがある程度担って行かないと難しくなりつつある。日頃から開業医と勤務医とが交流を深めることも重要であろう。いろいろ考えさせられる総会になった。

(宮本恒彦・昭54)

君津木更津

平成12年2月2日(水)、

君津木更津るのな会(会長 三枝一雄・昭32)は、木更津市「富士屋ホテル」に、臨床検査医学講座の野村文夫教授(昭50)をお迎えして、総会と記念講演会を開催致しました。

会長挨拶、黙祷、会計報告、事業報告等を経て、野村教授の御講演に入りしました。

演題は「臨床検査からみたアルコール医学」と会員一同、不安と期待の入り交じったもので、先生の面白おかしく、しかし学問的な講演に、笑い・ため息を

つき・我が身を悲しみ、あつと言う間に時間となってしまう

した。その後の質問は、皆さん非常に熱心でしたが、殆どの内容が、二日酔いせずに気持ちよく、たくさん飲めるのはどうすればよいのかという、のんびい達・自分の為のものでした。講演終了後、記念写真撮影を行ってから、懇親会となりました。会場は野村教授をメインテーブルに、三枝るのな会会長・長老の薬丸先生(昭16)・君津中央病院の北方院長(昭35)も同席していただき、そのテーブルを囲むように、神田勝夫(昭22)、小藤田和郎(昭25)、葛田瑞世(昭25)、池田昭(昭27)の各先生をテーブル長に、卒業年度をまねばなくならし、昭和58年卒までの会員を一堂に、昔



の話、最近の話題などを楽しみました。演題がよかったお陰で、卒業年度を忘れ、十二分にお酒を楽しむことができました。ご長老の先生方も息子とお酒を飲んだようで楽しかったそうです。

二次会は、木更津市の賑やかな場所、多くの会員を集めて行われ、野村教授のいい喉を披露していただき、大変盛り上がり、遅くまで過ごすことになりました。

今回は、総会の開催まで時間がなかったため、出席がやや少なめでしたが、会員は100名以上いますので、幹事も更なる努力を重ねると共に、「るのはな会」のよさを再認識していただきたいと思っています。

(松清央・昭43)

シンガポール 亥鼻会便り

呼吸器内科の派遣医師として、淡路島と同じ面積を持つ北緯1度のシンガポールに勤務しておよそ2年半が経ちました。旅行先として、また飛行機の乗り継ぎなどで訪れたことのある方は大勢いらっしゃると思いますが、ここで仕事をし生活をしますと少し違う日本が見えてくることがあります。今回はそのような中から医療に係った話題を提供さ



せていただきます。

シンガポールでは元々鶏料理が好まれる傾向にあるのですが、1998年末から1999年4月前後までは特に鶏料理の人気の高まり、レストランでは品切れになり、マーケットでは鶏肉の値段が上がりました。この鶏の値段高騰の原因がおわかりになる方は、かなりの東南アジア(シンガポール)通といつてよいと思います。原因は、マレーシアとシンガポールで流行した新種のニパウイルス感染症です。この感染症は豚に密に接触する人が発病するため、流行当初から豚が原因であると疑われて、日本脳炎と間違われていたほどでした。シンガポール政府は早々に豚を処分した上

で輸入を全面禁止し、マレーシア政府は流行地域の豚をすべて屠殺しました。結局両国で処分された豚は100万頭前後にもなっています。そのためシンガポールでは豚がいっさい手に入らなくなり、バクテー(豚とハーブを煮た料理)専門店が営業を停止し、鶏の値段が高騰したわけです。最終的には、マレーシアで100人、

シンガポールでは1人の死亡者を出して流行は終結しました。この果敢な対応は、2000年の手足口病の流行でも威力を発揮しました。9月に4人の子供が亡くなるやいなや、10月から2週間にわたって全国すべての幼稚園、託児所さらにはプールや公園までもが完全に閉鎖されました。後に、台湾やマレーシアで数年前に数十人の死亡者を出したエンテロウイルス71の流行であることが判明したのですが、この処置の後速やかに流行はおさまる10月以降死亡者は出ませんでした。これら思い切った対応のみが流行を食い止めたわけではありませんが、都市国家ともい

る面もあるのですが、日本を振り返って見ますと、未知の感染症の侵入に対ししっかりとした危機管理ができたのか疑問に思うところもありました。

ビジネスの世界では国境がなくなりつつあると言いますが、交通手段の発達によってヒトを始めとする媒介動物の往来が容易になり、感染症もまた国をまたがって流行するようになっていきました。実際、当地でデング熱に感染した人が日本で発症し治療を受けることも稀ではありませんし、日本では年間100人以上のマラリア患者(ほとんどが輸入伝染病ですが)が発生しています。かくいう私も、来星当初感染症にはとんと疎く、高熱、頭痛、関節痛という教科書通りにすぐデング熱を疑って片端から検査をしていたのですが、実はそういう多くの患者はインフルエンザが原因でした。船で往来していた時代は、熱帯でインフルエンザが流行することもなかったのですが、飛行機で移動が始まり寒冷地での感染症が熱帯にも持ち込まれるようになったのです。シンガポールは北半球、南半球のどちらとも人の往来が多く、12月から2月、6月から7月の年に2回インフル

エンザが流行します。それにともないインフルエンザワクチンも両半球用の2種類のものが用意されているほどのことです。このありふれたインフルエンザでさえ十分に診断できない、自分の未熟さをこの機会に痛感した次第です。日本では専門医志向が強く、プライマリケアを学べるのは卒業後最初の数年に過ぎません。そこで、未熟な私からお願いですが、研修医を教える立場にあるのは同窓会の諸先輩方々には、身近な感染症の教育にも力を入れていただき、研修途上にある若い医師には、いろいろな機会をみつけて熱帯病を含めた感染症を学んで欲しいと思うのです。

皆さんご存知のように、明治30年に制定された「感染症予防法」が、およそ100年ぶりに平成10年改正されました。これにともない感染症対策や医師への教育体制も変化していくものと思われませんが、時代の流れは早く、臨床の場で未経験の感染症に遭遇してしまうこともあるでしょう。そういう場合を想定して、どの医師や医療機関に相談したらよいか、自分なりのネットワークを構築しておくことが大切ではないでしょうか。国

レベル、個人レベルの危機管理の重要性が日本の医療社会に徐々に浸透していくことを望んでいます。

ところで、平成7年度の第一解剖学嶋田教授、平成9年度の肺外科山口教授来星に引き続き、平成11年12月2日呼吸器内科栗山喬之教授御夫妻を迎えて、シンガポール亥鼻会が、シンガポール市内バインツリークラブにて開催されました。わが千葉大学医学部は、戦前から多くのアジア留学生を輩出してきましたが、日本以外のアジアの国で亥鼻会が作られたのは私が知る限り今回が初めてです。お互い母校のある日本から離れ仕事をしているため、日頃からよく連絡をとりあっている間柄ですが、いざ全員が集まるとなるとなかなか機会がなく、呼吸器内科関連施設であるシンガポール日本人会診療所の視察を兼ねた栗山教授の訪問が良かったです。

生々しく(現在も活躍中の方が多い)、同級生と会ってもあまり話題になることがなく、とてもつらやましく感じました。

現在日本をはじめシンガポール以外で活躍の皆様は、これら出席者と会う機会はとても少ないと思います。この場を借りて、出席者の紹介をさせていただきます。これから少しでも旧交を取り戻していただければ幸いです。写真向かって左から、昭和47年卒 Suwandi Ko (マウントエリザベスにて一般外科、胃腸科で開業)、昭和42年卒 Tang King Twok (マウントエリザベスにて心臓外科で開業)、昭和61年卒中田暁(前シンガポール日本人会診療所医師、現住友化学千葉工場産業医)、昭和43年卒栗山喬之(呼吸器内科教授)夫妻、昭和37年卒町田孝子(マウントエリザベス放射線科非常勤医)、昭和40年卒 Chan Kiat Choo (タングリントシヨッピンセンター内にて外科で開業)、昭和63年卒溝尾朗(シンガポール日本人会診療所) 現在のところ次回シンガポール亥鼻会の開催予定はなく、どなたかきっかけをつくってくださる方の来星をお待ちしております。

(溝尾 朗・昭36)

ク ラ ス 会

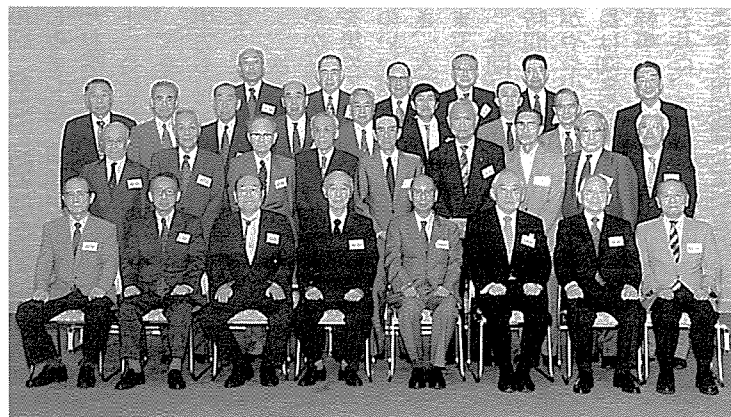
もぐら会
(昭23卒)

コンピューターの2000年問題も事なく済んで、今世紀末、卒後52周年のもぐら会は、9月24日、東京駅ステーションホテルで行われた。集いし者、稍少なく31名。まず、相変らずの顔なれど、例年の如く集合して、存在を写真に残す。開会に先立って前年度逝去の、安藤哲一、伊藤宏、井上正士、小西義

男4君の面影を偲び、冥福を祈って黙祷。
乾杯は吉田亮君。出席者の健康、病欠者の回復を祈り、来年の再会を願って杯をあげた。

高村幹事の司会により、本年、春秋、計4名の叙勲者中、萩原、窪田、伊東君より挨拶があったが、東條君の病欠は残念であった。

暫しの各テーブル毎の歓談の後、全員交々一言あるべしとて、司会の指名により語った。各人の述べる所は、「遊ばせて置くのは勿体ない」との恐らく周囲の好意から各種検診、健康管理の業務等に携わるもの。老いらくの仕事として週数日の診療を行うあり。ゴルフ、山歩きなどを楽しむあり。全くの引退後の悠悠自適を楽しむあり、で夫々が納得しての人生の過し方であると思つた。



過ぎ行く時の流れは疾く、来年は21世紀なるエポックな年、喜壽を

送り、迎える者も多く、多数の級友の参加を求めるべく各人の努力と再会を約し、別離を惜しみつつ散会した。尚、来年、21世紀最初のもぐら会は、幹事広瀬震一、窪田金次郎両君、日付は9月15日(老人の日)と決定した。是非、手帖、カレンダーに記入し、多数の参加を心より希うものである。

出席者(前列左から)吉田亮、上野高次、松山茂、伊東和人、萩原彌四郎、窪田金次郎、広瀬震一、黒須吉夫、(第二列)吉岡宏三、吉田作杉山静也、吉田充、西村文夫、小倉保己、有賀光、大津饒、木村滋、(第三列)林易、宮崎隆次、平岡真、岩間定夫、奈良四郎、藤井日出男、前田祐伊藤力、堀江昌平、(上段)窪谷満雄、高村良平、柴田鉄郎、工藤興一、板垣修造(以上31名) (伊東和人)

平成12年10月21日(土) ホテル・パシフィック・東京(品川)にて恒例の三一会が開催された。晴天にめぐまれ、開始時間が午後5時30分というのに、ほぼ全員が時間内に集合した。今年にはミレニアムであり、また大部分の級友が古稀を迎える年齢であるので、人生

昭三一會
(昭31卒)



山口庚現
今回発行した古稀記念千葉大学三一會ミレニアム誌、表紙のイラスト



の区切りがミレニアムと重なったのを祝福したいと言う気持ちで、この会に早めに参加された方が多かったと思う。現役でバリバリやっていた時代には考えられない光景である。挨拶にしても、近況報告にしても、皆ゆったりとした感じで、会場の中はなごやかな雰囲気であった。今回は同クラスの開業医の集まり春秋会が解散し、昭三一會に合流し

て2回目のクラス会開催の年なので、今年2月には、クラス会員の連絡を充実するため、新しい住所録とEメールを完成した。これで、会員の連絡が早く確実になった。又、今回はミレニアム+古稀を記念して、ミレニアム昭三一會誌の発行を企画した。内容は家族より集めた約四十枚のはがき原稿、千葉大医学部のはなな会誌に今まで、昭三一會、春秋会より投稿したクラス会報告の抜粋、小野君の巻頭言(人生の正念場)、小川、遠藤、西沢、北川諸君より投稿していた、心疾患、食道疾患、胃癌、現在の医療情勢についてのコメントなどが含まれている。このミレニアム誌は35ページの小誌です。幸い編集が間に合って、参集した皆に配布できた。又古稀の記念に集合写真を撮った。午後5時45分からの撮影だったが、珍しく全

員参加の写真ができた。皆さん、余裕を持って会に出席されたようである。会は今年度、惜しくも亡くなられた山口豊、滝沢明祐、野澤栄司諸君のご冥福を祈り黙祷。次に、会からの報告。遠方から出席された辻君の乾杯、会の近況報告などを交えてなごやかに進化した。開会から閉会までもかなりの時間がとれたので、皆、ゆったりとした中で話がはずんだようだ。ミレニアム誌の中にも、みなそれぞれの思いが記録されているので、更なるお互いの交流が期待される。また、埼玉大学の学長になられた北川定謙君の提案で、来年の6月頃、大学の見学会をしようと言う話もでた。皆、まだまだ好奇心が旺盛である。午後8時半元気で再会することをお約束して会はお開きとなった。なお、当日の出席者は、猪狩、井幡、庵原、上野、子遠藤、小川、小野、蟹沢、川



みふみ会
(昭32卒)

平成12年11月11日(土) 午後6時、日本橋「たいめいけん」にて開催しました。(幹事・和賀井薫 竹内孝 吉田豊)

このクラス会は、古くは学2のころ「アノマリア」という名前で同級会誌を発行し、活発なクラスであった。クラス会名に「アノマリア」は不適当であろうとのことで、卒業後は、語呂合わせ(32年3月)で「みふみ会」と改称し(卒業三十周年記念誌による)、今日に至っております。開催時期は、海外在住の方の都合に合わせ、春や夏に開いたこともありましたが、最近では11月上旬の土曜日に開催することになっています。

日の、王真麗さん(カナダ在住、現マリー・リーさん)からカナダの生活につき、いろいろと楽しいお話を聞きました。次いで「たいめいけん」の小皿料理を味わいながら、出席者全員から現在の活躍状況や健康などについてのお話をうかがいながら、楽しいひとときをすごし散会しました。

開会に先立ち、10月2日に大腸がんで亡くなりました故窪田俊夫君の冥福を祈り黙祷を捧げ開会しました。通常ですと、会長役の高橋英世君(千葉労災病院院長の挨拶があり、母校の現況などのお話をうかがうことになっておりましたが、今回は病院行事と重なり欠席でした。開会の挨拶は遠路来られた戸川清君(秋田労災病院院長)にご挨拶をいただきました。次いで故窪田俊夫君の思い出を福富久之君からうかがい、故人を偲びました。窪田俊夫君は、卒業30周年記念誌発行の推進者でもあり、実に惜しい方を失ったと思います。心よりお悔やみ申し上げます。また卒業以来はじめて来

このクラスの卒業生は85名、物故者は10名で、開催通知は75名に出し、出席者は29名でした。今世紀最後の「みふみ会」でもあり、比較的大きな集まりが実現しました。写真前列左から 佐々木邦幸、高橋柳子、李(王)真麗、福富久之、福田陽、堀敬明、夏目隆一、中列左から 飯塚正章、加藤嘉彦、横尾敦夫、戸川清、高倉永政、布川武男、野本昌三、西村宏、西村忠雄、和田康敬、川口幸夫、竹内孝、後列左から 矢野和之、村上和、藤本茂、岩瀬亀夫、東公、藤田真、川島裕、石川正士、吉田豊、野口照義

次回は来年11月10日(土)の予定です。(吉田豊)

43 卒 沖 縄 同 窓 会

私たち昭和43年卒業生は、所謂学園紛争下に卒業し、

千葉43年卒クラス会



それまでのインターン制度が廃止になった初めての学年でした。当然の事として国家試験も変則で、6月と9月に開催され、国試ボイコットや学生運動等でクラス会も割れてしまった経緯をして参りました。

その中で殆どの同級生が苦勞をしながら自主研修を重ねて今日に至っているのですが、現在多くの同級生が第一線をリードしている姿を見るとまさに我が43卒万歳と叫びたくなる心境です。しかし、残念ながら同級生の中にも病に倒れて既に他界してしまっている人

も何人か出てきております。そして、この様な思いも含めて、4年前にニューヨークで開業しているヨシ・セイシン君・林さんご夫妻の下でクラス会を開催し、その時に出席した沖縄出身の堀川君の提案で、今回の那覇での同窓会が実現しました。

中を予定したのですが、やはり忙しい年代とあって参加者は14名と少人数でしたが、殆どが家族での参加であり、宴会はかなりにぎやかな雰囲気で行われました。特筆すべきは神津さん(旧姓、三井)はご主人とともども家族5人の参加で非常に感動を覚えました。11月4日のメイン・パーティーには昭和39卒で琉球大学第二外科の古謝景春教授、44卒で健康管理センターの高良宏明教授、同じく44卒で脳神経外科の吉井与志彦教授、沖縄で開業している44卒の照屋功先生方が特別参加さ

れ、更に会を盛り上げて頂きました。泡盛とオリオンビールで乾杯し、出席者全員の近況報告と、同伴者のスピーチが行われました。そろそろ還暦を迎えようとしている人も多い学年ですが、時の経つに連れて皆学生時代にタイムスリップして懐かしい昔話に酔いしれておりました。二次会は堀川、仲尾両君の勧めで琉球民謡酒場に席を移し、琉球民謡、カラオケを楽しみ、最後は堀川君の指導の下で琉球民謡のカチャーシーに合わせて全員で踊り那覇の夜を十分楽しめました。楽しく過ごした3日間でしたが沖縄が初めての人もおり、夕方までの過ごし方は各々違っており、ゴルフ組と名所旧跡観光組に別れ、出発日には国際通りでショッピングをしたり自由に過ごしました。兎に角沖縄での3日間は皆童心に帰って大いにエーションしました。これも早くから準備をしてくれた盛君、更に現地でホテルの手配から会場の設定と労を惜しまず準備してくれた仲尾君、堀川君の尽力があったからこそ感謝しています。最後には、次会はタイ国の同級生、パナロップ君の地元で開催しようとの声も出ていましたので、



これからが楽しみです。そして、改めて健康であることの有り難さを再認識し、いつまでもこの同窓会が継続することを願っています。

当日は開始時刻の午後6時より30分以上も前から集まり始め、会場のそここで談笑する光景がみられた。この日は、東海道新幹線も一時不通になる程の悪天候に見舞われたにも拘わらず、51名が出席した。会は現在千城台で開業している古川斎氏の司会で始まり、冒頭昭和52年卒業生中唯一、病を得て早逝した阿相幸治氏の冥福を祈って、一同黙祷を捧げた。次いで三井記念病院に勤務する奥野妙子氏の音頭で乾杯が行われた。引き続き教育学部の磯辺啓二郎教授がスライドを用

52 会

平成12年9月16日、ほぼ10年振りに昭和52年卒業生の同期会が、有楽町の帝国ホテル本館で開催された。昭和46年入学あるいは昭和52年卒業生で、同じ時期に机を並べて学び、また共に遊んだ仲間を対象とした非常にアバウトな同期会である。従って出席者の中には、本来の在籍義務年限を越えて、学生生活を満喫した人達も少なからずみられた。

いて、西千葉と亥鼻両キャンパスの現状について説明した。とりわけ卒業後長期間千葉を離れていた旧友たちにとっては、懐かしくもあり、またその変貌振りは驚きであったようである。

この後第2外科の鈴木孝雄助教からは、国立大学の大学院大学化・独立行政法人化の問題などに対する、千葉大学の現状と対応について解説が行われた。

会の進行に伴って、出席者の近況報告が行われた。44年入学の四元徹志氏の、50年卒、51年卒の同期会からは声がかからないが、52年卒の同期会から初めて声がかかったというスピーチは、会場の拍手喝采を浴びた。折からの台風の通過を物とせず、遠路沖繩から参加した宮城裕之氏のスピーチは、次回の同期会は沖繩で開催をという、熱心な誘地運動であった。

今回は同期会の総会も兼ねて行われたため、(1)同期会の正式名称を「52会」とすること。対象者は冒頭に記した通りである。(2)同期会運営の事務局機能を果たす「幹事会」の承認。(3)次回の同期会を3、4年後に開催すること等が採択された。終了予定時刻の8時半を廻ってから、全員の記念

撮影を行い散会した。引き続き17階のレインボーラウンジに場所を移して、2次会がもたれたが、1次会の参加者がほぼそのまま出席した。1次会ではジュッフェ形式で行われたため、そろそろ腰に疲労を訴える人も出始めており、2次会では席に腰を据えて、後継者問題・大学の医局の在り方・趣味の話・自慢話・単なる噂話などに華が咲いた。2次会から合流した人もあり、外では豪雨に加えて、時折稲妻が閃光を発していたものの、一同全く意に介さず、またたく間に2次会終了時刻の11時に迫った。

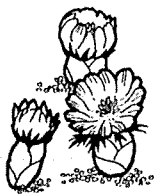
名残は尽きねど再度記念撮影を行って散会となったが、猶ラウンジ閉店時刻の11時半まで残って、熱心に話し込む姿が少なからず見受けられた。後日、1次会・2次会ともに出席していた湊明氏曰く、「時間が足りなくて、3分の2位の人しか話ができなかったよ。」

〔出席者〕五十嵐辰男、石出猛史、磯辺啓二郎、今井克己、今泉照恵、岩田次郎、岩田(坂本)裕子、植木良裕、宇梶晴康、宇田川晃一、遠藤文夫、太田義章、大竹喜雄、岡本和美、奥野(石井)妙子、尾崎正彦、笠井(中島)みさ子、川田

崇雄、木村正幸、久保田浩一、栗原和幸、栗原(三浦)まな、小林純、島上實、鈴木孝雄、須田啓一、須田純夫、高橋敏信、高山順、武永博、多田羅勝義、田中幹雄、玉村年健、塚田(村木)純子、中澤肇、林田和也、半田(大島)郁子、福田利男、古川斎、榊鏡年清、松岡明、松前孝幸、松本明石、水谷正彦、湊明、宮城裕之、村野(水谷)早苗、山縣正庸、山田善重、四元徹志、寄藤和彦(括弧内は旧姓敬称略)

今回幹事の不手際の為に通知が届かなかった方は、古川医院(T E L) 043-234-4664 (eメール) dawn-child@mtb.blobe.ne.jp に連絡を頂きたい。

52年卒業生は、現在社会の最前線にあって、最も大きな負担が課せられている世代でもある。今回残念ながら出席できなかった方達も含めて、同期生の今後の健康と活躍と幸運を祈りたい。(石出猛史)



二〇〇〇年度世界ベテランテニス国別対抗 日本チームに参加して 於南アフリカ ケープタウン

高見澤裕吉(昭27)

日本テニス協会から2000年度世界ベテランテニス国別対抗(70歳以上)日本代表チームの一員に選抜され、南アフリカ ケープタウンへ遠征した。試合は団体戦で、単2・複1、3セットマッチである。チーム編成は4名。

3月16日(木) 12時 成田発 シンガポール経由。26時間後ケープタウン着。朝の空港ロビーには各国の旗の下に事務局があり、個人登録証等を渡している。空は、紺碧、雲一片もない。太陽は強いが風はさわやか、高原の夏である。サボテンの赤い花が目につく。市内への道路は広く、すばらしい。夕刻ウォーターフロントへ行く。ここは、ケー

プ港に隣接する巨大プロジェクトにより完成したレストラン、ショッピング等のレジャー施設であり、世界の食品は多種、質も良い。価格は一流レストランでも一人三千円位、消費税は14%従業員への対応はすこぶる良い。アフリカ料理のワニ、オーストリッチの肉も食した。

18日(土) 午前テニス、午後テニスブルマウンテンへ行く。標高1800m、山頂は平坦、霧がかかるとテニスクロスを載せたようになる。頂上からは大西洋、港、山と絶景である。

19日(日) 主将会議、ドロイ決定、参加13ヶ国、4グループによるリーグ戦、ついでトーナメントにより順位を決定することになった。我国は、オーストリア、スウェーデンとの組み合わせになった。夜ウェルカムパーティー。

翌日から試合開始になったが吾々はオフ。喜望峰ツアーに参加した。ケーブ半島は市内から南へ70km、巾10km、大西洋とインド洋を割って突き出た半島で先端に喜望峰がある。途中大西

洋側は温暖で、漁港・別荘地が多く、家はヨーロッパ、地中海沿岸部に似ている。オランダの風車も動いていた。インド洋側は、風が吹き荒れている。ケーブポイントのケーブルカーを降り、絶壁の先端へ登り始めると、急にインド洋側からの風が激しく危険。残念ながら中止する。青黒い海に船影はなく、水平線は弧を画く。インド洋と大西洋、感激の一刻であった。ここは、かつて海難事故が多く「嵐の岬」と恐れられ、「さまよえるオランダ人」の幽霊船もここでのことである。喜望峰と改名されたのは16世紀初頭、バスコダガマのインド洋航路発見を記念してポルトガル国王が「ポルトガルに希望を」との意味で名付けられたとのことである。21日より試合、優勝候補のオーストリアと対戦。全くテニスをさせてもらえなかった。完敗。翌日は対スウェーデン1対2にて惜敗。リーグ戦2敗、9、13位のトーナメント。第3戦はブラジル。2対1にて快勝、初勝利をあげた。

夜、歓迎ディナーパーティー。

ITF会長、市長、観光大臣等のあいさつ、歓迎行事参加選手の余興、特にオーストリアの元デ杯代表選手によるクラシックピアノには感銘した。吾々はいずれも仕事のみ、そして演歌では通用しない。これからの若い学生は世界に通じる英語と教養を身につけることが必須である。

第4戦はドイツ、0-3で完敗。3月26日(日)から個人戦が開始されたが、吾々は郊外350kmにあるサファリ見物の小旅行を選んだ。

ITF世界ベテランテニス国別団体戦、吾々は1勝3敗、13ヶ国中10位であった。いささか不本意ではあるが、善戦したと思っている。試合を通して、国によりプロとアマの差を感じた。換言すれば、大相撲の三役と学生相撲の差である。

試合もさることながら、生涯に残る楽しい経験をした。テニスがなければ行くこともなかったであろうと思うと、テニスの楽しさ、テニスによる新しい友人との交流を得たことは幸福である。最後に、御世話いただいた人々及び平素練習相手をしていただく皆様、医学部学生諸君に感謝している。(名誉教授 千葉県テニス協会長)



盟友加納六郎学兄のご逝去を悼む

井出源四郎(昭19)



平成12年9月20日、君のご葬儀に参列し、私は男泣きに泣きました。

君が心筋梗塞の兆候を覚え、貫洞一夫氏(昭22)のお勧めで、東京女子医大に於て手術を決行したのが今を去る二年余前のことだったと記憶します。見事に危急を乗り越えられて、再び同窓会に出席され、元気な君の温顔に接することの出来たことを心から喜び合ったことでした。

その君が今年春、今度は脳梗塞で倒れたとの知らせが、川村明義氏(昭20)から届きました。何という酷しい現実でありましょうか。夢かとさえ思ったことです。その後奥様のご希望ということから、いずれば本復なさるであろうことを願って、お見舞を申上げる機会のないままに、半年を経ずして、九月十七日の朝、貫洞氏か

らの電話で君の訃報を知られました。よもやと思いましたがそれが現実でありました。実はその直前の9月15日、私共の卒後五十六年目のクラス会が、君の学習院時代からの親友であった佐藤洋君と清水衛君の計らいで、十数名の級友が東京駅に集まったのです。そして会の冒頭で君の全快を心から願ったのに。

思い返せば学兄との最初の出逢いは、昭和16年(昭和19年)、母校千葉医科大学入学の時でありましたから、何と数えて六十年前(第二次世界大戦勃発の年)ということになります。まことに永い交友でありました。

旧華族(青木家)のご出身であった君は、その容姿まことに端麗で正に貴公子の風格を具え、入学当初から幹事としてクラスの陣頭に立ち、諸般のクラスの行事に盡力されました。特に私はクラスの中で同じグループに所属したことから、大学の学生生活の中では終始君のご指導を受けたように思います。

大学を卒業してから、君は陸軍、私は海軍と別々の道を歩くことになりましたが、お互いに無事復員することが出来て、君は短期間外科の研修を積まれた後、東大伝研(現在の医科研)の寄生虫学研究室に新分野の開拓を志して母校を離れ、私は母校の病理学教室に籍を置くことになり、夫々に研究の対象は異っても共に形態学の分野を歩むことになりました。

君の学究としての生活は東大伝研から東京医科歯科大学の公衆衛生学教室、医動物学教室主任教授へと移り、その研究成果はまことに凄まじいもので、日本国内はもとより世界中を駆けめぐり、爬虫類、魚類、鳥類、両棲類そして大小の昆虫類等々、凡そ有毒動物と言われるものの基礎的、臨牀的研究業績は国際的にも高い評価を得るものばかりで、唯々敬服するところでありました。

このような学生生活の傍ら、大学行政、学会活動そして文部行政の数々にも貢献され、医学部長、学長として多彩な能力を発揮され、常に悠揚迫らず、これらの多難な職責を全うされたこと深く敬意を表する次第です。私も君と全く同じ時期に母校の医学部長、学長の職務を課せられること

となり、文字通り君とは二人三脚の生活を共に歩むこととなりました。奇しき因縁と申すべきでありましょう。大学入試制度や医学教育の改革そして中日友好病院の建設等に挑戦し、共に苦勞をした十年という歳月は今となっては忘れ得ない数々の思い出の映像として私の脳裏を去来して離れません。

お互いに大学を去ってからは、信州大学学長北条舒正先生のお計らいで毎年数人の同時代の学長さん方が信州の温泉地を廻り歩き、所謂「学長サミット」と称して一、二泊の修学旅行をすることが楽しみでした。時に「松茸をたらふく食う会」であったり、山野跋涉、露天風呂での談笑、そして又「市民の皆さんとの教育に関する対話の会」等々楽しい思い出が次々と浮びます。然し今やそれ等を語り合おうとしても君は居られません。何とも悲しくやりにきれない気持です。君が私より先に逝ってしまうなんて私にはとても考えられなかったことです。

中の「訣別の詩」を甲板の上で口づさんでいたことを思い出しました。それをここに引用させて頂きます。

「訣別の詩」

言う勿れ君よ、別れを世の常を、又生き死にを。海原の遙けき果てに今やはた何をか言わん。熱き血を捧ぐる者の大いなる胸を叩きて、満月を杯に砕きて、ただ屢し酔いて勢えよ。わが征くはバタバタの町、君はよくバンドンを銜け。この夕、相離るとも輝かし南十字を、いつの夜か共に見ん。言う勿れ君よ、訣別を。見よ空と水打つところ雲はゆき雲はゆけるを。

そう遠からざる将来君の後を追って私も行くことになるでしょう。そしてその時又君と共に南十字星を眺めながら思いの限り語り合おうではありませんか。待っていて下さい。心からご冥福をお祈りいたします。



おくやみ

岡田 長豊(昭8)	渡辺 誠之(昭21)
清川 尚道(昭10)	町田 昌廣(昭24)
後藤 秀倫(昭10)	小藤田和郎(昭25)
斎藤又三郎(昭10)	鈴木 義雄(昭25)
渡辺 宗次(昭10)	目々澤俊夫(昭25)
南 武(慈恵医大昭10)	池田 昭(昭27)
神谷 博達(昭13)	森島 邦夫(昭29)
吉岡 作衛(日大歯昭13)	小林 賢(昭30)
鈴木 正三(昭16)	野沢 栄司(昭31)
被川 一男(昭16・12)	大塚 清蔵(日本医大昭33)
金子 兵庫(昭19)	小林 正直(昭40)
石原 静雄(青医専昭19)	河野 恩超(昭46)
加納 六郎(昭20)	高山 真理(平9)

〆お知らせ〆

第一内科科学教室および同門会は「二〇〇一年記念フォーラム」を左記の如く開催しますので、皆様の御参加を心よりお待ち申し上げます。なお、御質問等、ございましたら第一内科医局まで御連絡ください。(電話043-226-12083)

千葉大学第一内科同門会
二〇〇一年記念フォーラム(参加費..無料)

千葉大学第一内科同門会 2001年記念フォーラム

日時: 2001年2月3日(土) 14:00-16:30
会場: ホテルニューツカモト

1. 特別講演 14:00-15:00

「21世紀医学・医療への期待と展望」
演者 行天良雄 先生(同会 上野高次 同門会長)

2. パネルディスカッション 15:00-16:30

「ゲノム科学と内科学の将来」
司会 谷川久一 先生(田原肝臓研究所長、久留米大学名誉教授)

パネリスト:

- 小泉政男 教授(東京大学大学院) : 消化器医学の立場から
- 上田志朗 教授(千葉大学大学院医学研究科) : 腎臓病学の立場から
- 清野 昌 教授(千葉大学大学院高度医療系) : 臨床病理学の立場から
- 小室一哉 助教授(千葉大学医学部第三内科) : 循環器病学の立場から

平成12年度 第2回常任理事会議事録

日時 平成12年11月22日
(木)16時～17時45分
場所 千葉スカイウイン
ドウス東天紅(セ
ンシティタワー22
階)

出席者 大藤正雄、沖真澄、
小幡裕、貫洞一夫、木内政
寛、国井光智、香田真一、
近藤洋一郎、税所宏光、阪
信、佐藤甫夫、鈴木信夫、
関根博、滝口正樹、富田裕
長澤仁一、萩原彌四郎、増
田善昭、道永麻里、武者廣
隆、矢野明彦、渡邊武

開会に先立ち、長澤会
長よりご挨拶があった。

議題

一、叙勲者・昇任者の四金
会招待について滝口理事
より説明があり承認され
た。

二、学外研究助成選考結果
について矢野理事より選
考結果の説明があり、六
件の採用案が承認された。

三、千葉大学同窓会(全学)
について近藤副会長より、
磯野学長より全学同窓会
についての提案があり準
備委員会が発足された旨
説明があった。るのほな
同窓会としての寄与につ
いて、今後検討すること
とした。

四、会則について長澤会長
より、会員相互の交流、
会員と医学部の連携強化
について、提案がなされ
た。特にホームページ開
設とその活用について、
今後検討することとした。
会則の改正の必要性につ
いても議論がなされた。

五、井出名譽会長への記念
品贈呈について滝口理事
より、井出名譽会長の御
貢献に対し、記念品を贈
呈して御功績を讃えるこ
とが提案され、承認され
た。

六、るのほな同窓会団体保
険について滝口理事より、
団体所得補償保険につい
て新規参入を希望する会
社がある旨、説明があっ
た。検討の結果、現状の
ままとすることとした。

報告事項

一、平成12年度予算執行状
況について、税所理事よ
り報告があった。基金の
意義付について今後検討
することとした。

二、今回の同窓会報につい
て、鈴木理事より報告が
あった。会員の各種広告
を歓迎する旨説明があっ
た。

四金会

引続き同所で四金会が
行われた。木内理事の司
会で、長澤会長の御挨拶、

井出名譽会長の乾杯御発
声に始まり、和やかに歓
談の時を過ごした。御招
待の平成12年春および秋
の叙勲者を代表して、伊
東和人、中島博徳、池二
郎の各先生、また警察庁
長官賞を授賞された福田
恵司先生より御挨拶を頂
いた。新任、昇任教官を
代表して伊豫雅臣教授、
島正之、沼田勉、馬場雅
行、岡田誠治、青江知彦
の各助教、宇田川晃一
講師から御挨拶を頂いた。
多くの会員の参加を得て、
有意義な懇親会であった。

ご注意下さい

千葉大学医学部同窓医人
名鑑(文教出版)係と称し、
氏名、勤務先等を記入する
調査カードが郵送されてお
ります。これは本同窓会と
は何ら関係ありません。
次会の会員名簿発行は、
二〇〇三年です。

訂正とお詫び

二〇〇〇年版同窓会員名
簿に、左記の誤りがありま
した。訂正しお詫び申し上
げます。

昭46卒 滝重内ゆり
(誤)在ロシア (正)東京都文
京区白山5-20-14
Tel 03-39415464

第25回るのほな美術展開催される



平成12年10月10日から16
日まで7日間、東京、銀座
のギャラリーひまわりで開
催されました。出品者は会
員19名と白鯨社の学生2名
で、書、水彩、パステル、
油彩の作品34点が展示され
ました。会期中は好天に恵
まれ、多くの来会者があり、
毎年お出でになる人達から、
展示作品の充実と質の向上
を耳に致しました。14日午
後、会場に参集して、恒例
の合評を1時間程行った後、
会場を資生堂に移して、懇
親の夕食を共にしました。

今回、新た
に幹事を2
名増員して
5名とし、
白鯨社の歴
史をまとめ
て、本会と
の連携をよ
り密にする
こと、また、
先に大学に
寄贈した会
員の作品の
保存状況を
しらべるこ
と等につい
て話し合いが
もたれまし
た。本美術
展に多数の同窓の方々の参
加を会員一同希望致してお
ります。左記に御連絡下さ
い。

幹事 石谷治彦(昭24) 仲
村長正(昭29) 山口庚児
(昭31) 島田哲男(昭41)
酒井忠昭(昭42)
るのほな美術展事務所
〒169-00075
東京都新宿区
高田馬場1-25-29
石谷医院内
☎03-3200-00078
Fax 03-3200-0253

二〇〇〇年 第25回るのほな美術展出品目録

氏名	年次	作品名
加瀬 幸雄	22	帰燕書半切
斎藤 英一	16	浴衣の女 10P 五十鈴川のほとり 8P
井上 通	24	人物 女優 ひまわり 水彩
長尾 透	16	真鶴 10F
島田 哲男	41	裸婦 パステル 10号 婦人像 パステル 8号
大村 光	17	花 8号 バラ 8号
柴崎 晃	28	浮島より浜勝崎を望む(南伊豆) 15F
榎本 貴夫	47	鬼怒川の春 8F
仲村 長正	29	羊蹄山雪中 8号 アラン島孤崖 1空と海の狭間で 1 3号
石谷 治彦	24	水上風景 6F
神山 英明	22	花 2000年 15P 高瀬川 京都 25P 水彩
辰野 治郎	34	バイオリンをもつ少女 8F 白い水差 他 15F
斎藤 宗寿	16	谷川落花 30F
酒井 忠昭	42	羅漢 10F
山口 庚児	31	公園 15F 広い庭園 15F
吉川 広和	40	麗 15F
川村 孝子	36	イメージ少年 20号 水彩 まつかぜ 10号 水彩
野口 真理	40	モンゴル服の女 20号 斑尾高原にて 15号 水彩
今井 力	22	海景 15F 静物 油彩
手塚 真紀	学生	ロマンチック街道 ローターブルグマ
金屋敷亨江	学生	ルス門 6号 ローターブルグ 郊外 6号
不出品		山川晋吾・宮下久夫・山口宗彦・大木勲

2000・10・10-16 銀座 ギャラリーひまわり 順不同

第2回るの は な 同窓会 学外研究助成決定

2000年度のるの は な 同窓会学外研究助成は次の六名に決定しました。

枝 美絵子 (川鉄千葉病院 脳神経外科、山形大平8)

「頭部外傷後海馬神経損傷におけるmicrogliaの役割」

大川 玲子 (国立千葉病院 産婦人科医長、産婦人科学、千大昭47)

「中高年男女の性行動、性意識と夫婦の関係性についての調査研究」

北村 伸哉 (君津中央病院 救急・集中治療科医長、救急・集中治療、千大平元)

「IIIの血中濃度迅速測定システムを用いた重症急性性肺炎に対する持続的血液濾過透析 (CHDF) の適応決定及びその効果判定に関する研究」

栗原 まな (神奈川県総合リハビリテーションセンター、小児科部長、小児科学、千大昭52)

「小児頭部外傷におけるリハビリテーションの実践と在宅への支援」

高橋 弦 (千葉市療育センター、心身障害児総合通園センター所長、腰椎外科、千大昭59)

「腰痛の神経症候学的診断に関する基礎的研究」

山田 英夫 (国立佐倉病院 消化器外科、島根医大昭58)

「大腸癌に対する腹腔鏡下手術の手法の確立と治療成績の研究」

るの は な 同窓会 賞

受賞候補者募集要項

第6回 (二〇〇一年度) るの は な 同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞 本会員 (甲および乙) で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。

②功労賞 医学および文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学るの は な 同窓会に多大の貢献をした者。

二、表彰

①学術賞 (五件以内) 楯および副賞 (総額二百五十万円程度) を贈呈します。

②功労賞 (三件以内) 楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、二〇〇一年1月5日から3月5日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。

審査結果は二〇〇一年5月中頃までに各申請者に通知すると共に、るの は な 同窓会報に掲載する。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

千葉大学医学部内 るの は な 同窓会事務局

043-120213750

るの は な 同窓会 賞

受賞候補者募集要項

るの は な 同窓会 総会の御案内

日時 平成13年6月23日 (土)

午後3時より

場所 ペリエホール (千葉駅ビル 5階)

5階

なお、千葉るの は な 同窓会は、

ペリエホールにて午後2時〜3時に開催いたします。

るの は な 同窓会 賞

るの は な 同窓会 賞

受賞候補者募集要項

第6回 (二〇〇一年度) るの は な 同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞 本会員 (甲および乙) で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。

②功労賞 医学および文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学るの は な 同窓会に多大の貢献をした者。

二、表彰

①学術賞 (五件以内) 楯および副賞 (総額二百五十万円程度) を贈呈します。

②功労賞 (三件以内) 楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、二〇〇一年1月5日から3月5日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。

審査結果は二〇〇一年5月中頃までに各申請者に通知すると共に、るの は な 同窓会報に掲載する。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

千葉大学医学部内 るの は な 同窓会事務局

043-120213750

るの は な 同窓会 賞

受賞候補者募集要項

第6回 (二〇〇一年度) るの は な 同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞 本会員 (甲および乙) で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。

②功労賞 医学および文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学るの は な 同窓会に多大の貢献をした者。

二、表彰

①学術賞 (五件以内) 楯および副賞 (総額二百五十万円程度) を贈呈します。

②功労賞 (三件以内) 楯および薄謝を贈呈します。

三、応募方法

所定の申請用紙により、二〇〇一年1月5日から3月5日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定

選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。

審査結果は二〇〇一年5月中頃までに各申請者に通知すると共に、るの は な 同窓会報に掲載する。

五、問い合わせおよび申請用紙請求先

千葉大学医学部内 るの は な 同窓会事務局

043-120213750

四金会のお知らせ

日時

平成13年2月28日 (木)、午後5時30分より。

場所

千葉スカイウインドウズ東天紅 (千葉駅前そごう西隣りセンシティタワー22階)

会員の方々に個々には御連絡は致しませんが、是非奮ってご参加下さい。

会費は三〇〇〇円

るの は な 同窓会 賞

受賞候補者募集要項

編集後記

本会報による二十世紀の刻印は果して十分か。編集終了の12月9日、時の矢に想いをめぐらしております。

約35年前に走馬灯はめぐります。現編集委員の柳橋雅彦先生と共に、井出源四郎先生や萩原彌四郎先生らに連れられてのことです。

東北地方などの諸先輩との談話の機会を得ました。爾来、直接、間接に本会報の編集に関わってきました。

大学の独立法人化を目前にして、るの は な の役割は今以上に重要となります。

そのような状況にあたり、二十世紀に果たし得なかった一事がありません。全国各支部の架け橋役です。亥鼻台から足を運ぶこともままならず、二十一世紀の展望を切り開く役割を十分果たしていないことです。

しかし、時代は代わり、IT時代。ままたらぬ時の矢とは違い、面の情報は一気に手中に入る時代です。

ITにめっぽう強い白澤浩先生に次号からの編集長を託すこととなりました。ご期待下さい。

(なお、一面の写真は、渡辺吉明氏の提供によるものです。)

(鈴木信夫)

埼玉県厚生連幸手総合病院

地域医療を目指す医師募集中!

当院は198床(療養型40床)の中規模総合病院として、幸手市とその周辺地域の公的中核病院であります。新しい時代に対応できる病院を目指して、改革、再建の途上にあります。病院で中核となるべき医師の不足があり、その補充が緊急の課題となっております。地域需要は大きなものがあり、必ずや働き甲斐のある職場を提供できると考えております。現在の診療科は、内科、外科、整形外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、が常勤であり、皮膚科、婦人科、脳神経外科、形成外科、麻酔科、放射線科がパートです。地域医療を志す方には是非とも当院への就職を検討していただきたいと思います。

募集科：小児科、産婦人科、脳神経外科、循環器科、神経内科

募集人員：各科1〜2名

年齢：40歳位まで

勤務形態：月曜から土曜まで診療、ただし週1日研究日あり

詳細につきましては担当者までご連絡ください。

連絡先：〒340-0114 埼玉県幸手市東4-14-24

幸手総合病院 院長：井坂茂夫 (昭51)

TEL：0480-42-1211

FAX：0480-43-2403

亥鼻キャンパス — 21世紀へ



(記念講堂)



(左:動物実験施設、中:図書館、右:医学部本館)



(医学部正面入口)



(長尾精一、荻生緑造両先生のレリーフ)



(医学部本館)



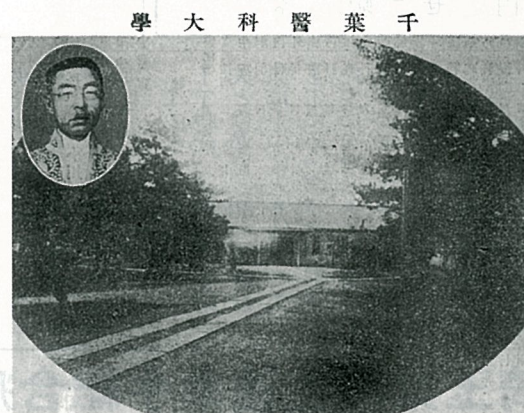
(福利厚生施設)



(医学部本館前広場)



(辛亥革命記念碑)



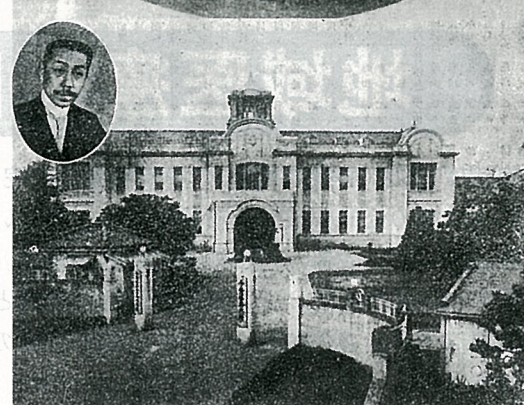
学大科醫葉千



(附属病院)



(医学部本館と附属病院を結ぶ連絡道路)



顔写真の上は松本高三郎学長、下は竹村正院長
日本医籍録(大正14年8月第1版発行)掲載写真より
—伊藤宣良先生(明24)の孫である伊藤賢司先生(東北大昭47)提供